



この一年間、世界は秩序無き奈落に落ち込むかのようだ
文明、宗教、経済的利権が幾重にも絡まって、
出口の見えない状況に追い込まれていく

国家、民族、宗教が一人の人間にとって何なのか
切り口がない
自分と世界の関連が捉えようにならないまま
毎日、殺戮の噴煙が上がる

長崎賞の授賞式で、筒井茅乃さんが語られた
永井博士が信州の茅野あたりの風景
かやぶき屋根に由来して名付けられたことを

出自がふるえる唇から語られる時
国や文化とは、一人一人から
その足元から見ていくこと、だとかみしめた

特集 1

タチヤーナ先生はみんなの太陽



2003年12月29日、タチヤーナ・シュミヒナ先生が、永眠されました。ゴメリ州立病院小児血液病棟のベッドでした。13年前、チェルノブイリの子どもたちの被害を心配し、小児科から独立させた血液病棟です。「この病棟は、JCFと共に作ってきました」。91年の出会い以来、「私たちが、ここで子どもたちを治療します」というシュミヒナ先生を、JCFは日本から応援してきました。今までも、そしてこれからも私たちは彼女のめざした「子どもたちの命を救う」ために活動を続けます。



59号 春

CONTENTS

特集 1	タチヤーナ先生はみんなの太陽	5
	タチヤーナ・シュミヒナ先生を偲ぶ 神谷さだ子	
	忘れられない笑顔 小池健一	
	タチヤーナ先生追悼	
	タチヤーナへのレクイエム 鎌田 實	14
特集 2	第 74 次訪問団報告	21
	支援の形態は変わっても 13年の信頼関係による協働は続く！	
	スローライフと衛星通信と信州大学病院 滝沢正臣	
特集 3	「永井隆平和記念・長崎賞」受賞	29
	永井隆 その志は今も人々の勇氣	
	出会い Встреча 「長崎受賞の旅」	
	己の如く 鎌田 實	
	那珂町通信	40
	連載随筆「かかわりのよびつぎ」<宮尾彰>	42
	ガニのロシア小話	44
	ベラルーシの食卓	46
	モスクワ便り	47
	振替用紙のメッセージから	48
	領収はがき送付について	53
	ありがとうございました	54
	スタディツアーのご案内	56
	ニュースクリップ	58
	ピキニ水爆実験被災から50年	60
	心揺さぶる映画「ゴジラ」第一作目を見る	62
	Здравствуйте! (事務局広場)	64
	本の紹介 Book review	66
	「女の机」(小林登美枝著)を読んで	68
	ベラルーシの食卓～チェルノブイリを語ろう～	69
	映画「アレクセイと泉」ビデオ「DO YOU BOMB THEM?」	70
	事務局日誌	71

タチヤーナ・シュミヒナ先生を偲ぶ



神谷さだ子（JCF事務局）

街は凍っていた。霧氷の街路樹。薄灰色の空にぼんやりと円形に浮かんでいる太陽。

新年の仕事始めに、いきなり届いたタチヤーナ・シュミヒナ先生の訃報。驚いたが、シュミヒナ先生が他界したと信じ難かった。

膝の上まで積もった雪を踏み分け、シュミヒナが眠る、その墓地に案内された。

2、3坪の方形の囲いの中は花輪が溢れていた。真ん中には、患者の家族から、同僚たちから、ご家族から、ドイツの友人達から……。十字架の下には新しい土が盛られ、カチカチに凍っていた。

「あなたはこの下に眠っているの？」信じられない。日本のみんなから、言付かってきたあなたへの思いを、私はどこに差し出したらいいかわからない。

その時、案内してくれた友人が声をか

けてくれた。

「タチヤーナは感じています。私たちの友人をきつと感じています」

仏教では49日と言われるが、ロシア正教では、亡くなって40日まで、霊は、現世にあるという。

雪の上にお花を置き、手を合わせても、あなたが居なくなつたと感じられない。

あなたの勇氣、まわりをすべて包み込むおおらかさ、子ども達に向けた無上の笑顔は、あなたに会った者達の胸から消えることはありません。

シュミヒナが心血をそそいだ子ども達の命を救いたいという思いに添うこと。それが13年間のJCFでした。これからも私たちは、あなたに抱かれながら、歩きましょう。

ベラルーシには、タチヤーナ・シュミヒナがいる、厳冬の中でさえもそう思います。

あなたは、大空、大地、そして太陽なんです。



忘れられない笑顔

小池健一（信州大学医学部小児医学教授）



2004年2月29日、足場の悪い雪道を10分くらいは歩いただろうか、たくさんの花に囲まれてタチャーナ・シユミヒナ先生は眠っていた。病んでいることもたちを治すために医師として誠心誠意働いてきたタチャーナ先生が永久の眠りについていった。時間が止まったような静けさの中で、彼女の笑顔が脳裏に浮かんだ。

タチャーナ先生に初めて会ったのは1991年4月2日であった。それまでに訪れたモスクワ、ミンスクの病院では日本と差がないほど高価な医療機器がそろっていた。あなたたちはどれくらいの援助ができるのかと問われ、まったく資金のないわれわれがこれか

らどんな形の医療協力ができるのか暗澹たる気持ちでゴメリ州立病院のドアを開いた。3階の小児血液科病棟でタチャーナ先生は待っていた。わたしたちには今入院している白血病の子どもたちを治療したくても薬もなければ輸血もできないのです。この国の医療レベルが低いのではなく、子どもたちを救う薬がないのです。これが14年にわたるJCFの活動原点となった。抗がん剤だけでなく、白血病治療に必要な抗生物質、G-CSF、輸血バッグ、無菌装置など日本から様々な支援が始まった。これにより、ゴメリ州立病院に入院した白血病の子どもたちの生存率は飛躍的に向上した。その成績を示

したときの彼女の表情は医師として自信と優しさに充ちていた。入院している子どもたちをみる母親のような彼女の眼差しはいまでも忘れられない。この国の人間はみんな収入がきわめて低いため、週末になるとターチャ（別荘）に行つて畑を耕すのです。私もじゃがいもなど野菜を作っているんですよ。これを語る彼女の笑顔は本当に素晴らしかった。

1998年、通信衛星でゴメリ州立病院から信州大学病院に初めて送られてきた画像は、何と彼女の乳がんが再発し、転移していることを示す衝撃的な画像であった。2003年2月6日、日本から運んだ無菌室のベッドの上で横たわる彼女と会ったのが最後の別れとなった。

白血病にかかってしまったベラルーシの子どもたちを一人でも多く治すために、そしてタチャーナ先生がいたために、みんなゴメリ州立病院に光を射

したかったのである。いつのころからか、タチャーナ先生やガリーナ先生は私にとって同志となった。あまりにも短い時間をかけぬけていったが、タチャーナ先生は医師として人間として私たち日本人の心にも数多くの足跡を残したと思う。



Гомельская Правда (ゴメリスカヤブラウダ)

彼女を思い出してください ありのままに…

Запомните ее такой...

Татьяна Шумихина ушла из жизни 29 декабря. За два месяца до этого ей исполнилось 54... По словам коллег – врачей Гомельской областной клинической больницы – она держалась мужественно и до последнего своего часа боролась с жестокой болезнью. Увы, победить ее было невозможно – даже с помощью новейших препаратов, предоставляемых друзьями из Германии. Служилом покаянь...

Медицина была ее призванием – это очевидно. Татьяна Петровна знавала авторитет высококвалифицированного специалиста в области детской гематологии, о чем свидетельствовала и ее 26-летний стаж работы. Ее уважали коллеги и любил пациенты. А ее профессионализм, ответственность и ответственность были замечены и по достоинству оценены за рубежом – в Германии, Австрии, Японии, где доктор Шумихина неоднократно побывала на стажировках. Она уверенно постигла все тонкости, которые были необходимы в работе, и приобрела многочисленных друзей. Благодаря профессионализму и чуткости коллегам-медикам Татьяна Шумихина с иностранными партнерами (в первую очередь, с немецкими) отделение детской гематологии, которое она возглавила в 1991 году, было оснащено современным и дорогостоящим оборудованием. Оно включало в себя, главным образом, бесценно. Не забывалась и такая необходимая оснастка – мебель и техника для маленьких пациентов, отсортированные шкафы и резинчатые мешочки для медперсонала. В Германии Татьяна Петровна помогла людям самых разных занятий: врач Ганс Петер Штеффенхальд, пастор Ганс Отто Валд, бизнесмены Эонтер и Хельма Штрукман и Отто Шинке, глава земельной службы в Ганновере Г-н Польке и многие другие. Партиями и единичными пациентами гомельского врача стали и сотрудники фирм «Феккер-Тайлер» (осуществлявшие (тоже бесценно!) транспортные перевозки). Сегодня все это забыто об стране.

Все знавшие Татьяну утверждали: у нее был легкий характер. Очень коммуникабельная и простая в общении, открытая и бесстрашная по натуре, она с улыбкой шла по жизни и искренне верила, что все будет хорошо. Порой даже тогда, когда самой было очень тяжело – мстала извержения пыльной полевки, привлекать к полному недоумению. Она...

превозмогла несомнимую боль и умудрялась ободрить коллег: «никогда, моя, все обойдется! Своей энергией, силой духа и целеустремленностью Татьяна заряжала окружающих, и не воспринимала ее было несчастья».

С 1 января 2004 г. отделение детской гематологии передано в ведомство Республиканского центра радиационной медицины и экологии. Хочется верить, что дело, которому стала бесценно служила Татьяна Шумихина, отныне в надежные руки. А о ней самой пусть останется добрая и светлая память – в сердцах тех, кто близко знал прекрасную женщину. И тех, кому она смогла вернуть самое дорогое на свете – жизнь.



タチヤーナ・シュミヒナが12月29日永眠した。この2ヶ月前、54才になった…ゴメリ州立病院の同僚達の言葉によると、彼女は勇気を持ち続け、最後まで厳しい病気と闘った。ドイツの友人から贈られた最新の薬の力でさえも、うち勝つことができなかった。

医療は彼女の天賦の才能だった。— それは、明らかだ。タチヤーナ・ペトロブナが、26年間の仕事で実現してきた小児血液分野でのハイレベルな技術をもつ専門家としての業績がそれを物語っている。

同僚達は彼女を尊敬し、患者達は彼女を愛した。彼女の専門性、明確な目的意識と秘めた情熱は、タチヤーナ・シュミヒナ先生がたびたび出張で訪れた外国、ドイツ・オーストリア・日本で高い評価を得ている事からも明らかだ。彼女は、鋭い感性で仕事に必要とされる事を理解した、そして、たくさんの友人を得た。シュミヒナの外国のパートナーとの専門的で純粋な人間関係のおかげで、1991年立ち上げた小児血液病棟は、最新の高価な機器が設置された。それは、外科手術用の重要な機器で、無償で設置されたものである。

小さな患者達のための家具やおモチャ、医療従事者のためのディスプレイ、シリンジ、ゴム手袋—そのような必要な<小物>も忘れてはならない。

皆…喪失感に心を痛めている。
タチヤーナを知っている総ての人が彼女のやさしい性格を思い出している。つき合いやすく、率直で、楽観主義者であり、天性の闘士だった。いつも微

笑みながら、心から総てがうまくいくだろうと信じていた。最も悪い一首の椎骨に転移し、まったく身動きできなくなった一時でさえも信じていた。彼女は耐え難い痛みのうち勝ち、仲間達を元気づけようとした。なんでもないと、黙って、うまくいくわ!

タチヤーナ自身のエネルギーと魂の力、命を愛する気持ちは熱く、周りの人達を照らしていた。彼女は、感嘆して余りある、すばらしい人だった。

2004年1月1日から、小児血液部門は共和国所轄の放射線医学人間環境センターに移転した。タチヤーナ・シュミヒナがひたむきに勤めたそのまのの仕事が、信頼できる手に渡されると信じた。

この素晴らしい女性を身近に知っている者達は、彼女についての親しみ深く、明るい思い出をもっている。天上のもっとも愛するものの元へ戻ることができた人—いのち…。

Медицинская новость (医療ニュース)

追悼記 タチヤーナ・シュミヒナ

40日前、重病を患っていたタチヤーナ・シュミヒナ・ペトロブナが世界を去った。ゴメリ州立病院小児血液科科長だった。タチヤーナ・ペトロブナは、血液学者として、ベラルーシだけでなく、ロシア・日本・ドイツ・スイスで有名だった。彼女は、高い専門性をもった医者というだけでなく、保健のオーガナイザーであり、すばらしい魂を持つ人だった。彼女の生きるエネルギーと楽観主義は、小さな子どもの患者や両親に、健康への希望を抱かせた。

タチヤーナ・シュミヒナは数十人の重い子どもの命を救った。ゴメリ州立病院小児血液病棟の近代的なレベルを上げつつ、彼女は仕事を愛し、迷うことなく、すべての人生を仕事にそそいだ。

残念だ。人生はなんて早く断ち切られることか。



タチヤーナ先生の望みを受け継ごう！

新年早々悲しい知らせで目の前が真っ暗ですよ！JCFとは切っても切れない存在でしたから・・・ゴメリのママ（マザー的存在）でしたからね。ホント！！一重に彼女の存在は重く・大きく・大らかで・暖かく（俺も言葉が見つからない）くらい偉大な女性でした。

合掌！！

どんな形でもいいですからJCFは彼女の偉業を後世に広める活動も必要です。JCFの支援目的にも影響する大きな柱を失った我々も今、今後の支援について考える時期でもあります。

彼女の達せられなかった望みを可能な限り応援しそれに報いることが彼女への供養ではないでしょうか？

廣浦学 (JCF・ME チーム)

ビックマザー シュミヒナ先生

何故、このドクターは“辛い”と言う言葉を出さないのかな？

何故、このドクターはいつも前向きなのかな？

何故、このドクターはいつも、いつも笑顔なのかな？

そして、何故こんなに素晴らしい先生が、病に侵されなければならないのかな？

私たちMEチームがシュミヒナ先生と出会って、わずかに数年の間にこんなにも胸に刻まれたほど、その存在は大きかったのでしょうか。

人間一人の力には限界があると、私たち日本人はすぐに口にするけれども、限界以上の情熱と行動でベラルーシの子供たちと向かい合ったシュミヒナ先生の業績を、私たちは決して忘れてはならない。

心よりご冥福をお祈り致します。

さようなら、ビックマザー シュミヒナ先生 小池保寛 (JCF・ME チーム)

(注) ME=臨床工学技士



思い出のスタディツアー

亡くなられたと知ってとてもショックを受けてました。4年前にお会いした時の、あの暖かく明るい笑顔は今でも鮮明に覚えています。先生に会えたことがスタディツアーでの一番の思い出でした。

倉垣真紀子

タチヤーナは今もこれからも私の胸に

臨界事故の翌年のスタディツアーで、ゴメリの小児血液病棟を訪ねた日、その小さな女の子は、信大医局との衛星通信診療室で泣き止まず、蒸し暑い部屋で涙と汗でぐちょぐちょになって母親の脇に立ち尽くしていました。

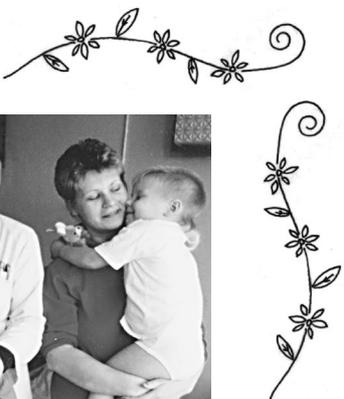
その時、少しの時間も惜しかったはずの主治医タチヤーナは、猛然と走り出し、その子のベッドからお気に入りの人形をつかんで息を切らせて戻って来ました。女の子の手に人形を握らせて、ぐちょぐちょと胸に抱き上げて笑顔で励ましたのです。

その瞬間、そこでは科学的治療行為を、大きな愛と強い信念が包み込んでいることを知りました。

以来、タチヤーナ・シュミヒナという名を聞く度、思う度、いつも私の胸にあたたかな励ましがよみがえります。それは、天国に行かれた今も、そしてこれからもずっと変わることはないでしょう。

ありがとう、私たちの敬愛するタチヤーナ先生。

谷田部裕子



タチヤーナのレクイエム

鎌田 実

1986年、チェルノブイリ原子力発電所の爆発事故で放射能の汚染が広がった。経済も崩壊した貧しい国で、子どもたちの命を守るために必死に働く女医さんがいた。
ぼくと同じ55歳。小児白血病病棟の部長タチヤーナ先生。
ひまわりのように明るく先生。
白血病の子どもたちのお母さんでもあった。

がんの転移

しかし、子供たちの太陽に大変なことが起きていた。
3年前、普段は白血病の診断や、治療法を指導するために使っている人工衛星を使った双方向テレビで、ドクタータチヤーナが悲しい告白をはじめた。

「1987年、チェルノブイリ事故の翌年に乳がんになりました。手術をして、いったんは元気になりました。

私のことより、子どもたちのことが心配で…。自分の体のことを忘れて、仕事を

事をして、勉強をして、また仕事をしました。ひとりでも多くの子どもを助けたかった。腰の骨が痛かったけれど、子どもたちのためにがまんして働きつづけていました。最近、痛みががまんできなくなっていました。検査してみると、骨への転移が見つかりました」

つらい告白は、抑制のきいた低い声で淡々と語られた。「再発です。多発性の骨転移があります。がん細胞が体のなかにばらまかれてきているみたい」しばらくどちらからも声がでなかった。8千キロ離れたゴメリと日本を結ぶニューメディアを、沈黙が支配した。障子一枚を隔てた所をつないでいる糸電話のように、お互いの息づかいまで感じるような気がした。

「子どもたちのために、生きたい」糸電話の糸が震えた。タチヤーナの目

に光るものがあつた。

痛みをこらえて

1986年ベラルーシ共和国で1745人だった乳がん患者が増加していた。放射能汚染の特にひどかったゴメリ州では、乳がんの発生が多くなっているという。

なんでだ。よりによってタチヤーナが乳がんの骨転移。痛みをこらえて、子どもたちに、ひまわりのような大きな笑顔をたつぷりとふるまっていたなんて。泣いている小さな子どもを抱きしめてあげるために、腰の痛いのをがまんして、無理に、かがんでいたのだ。ぼくたちが日本で、12年間に6億円あまりの募金を集め、69回の医師団派遣をしてきたのは、信頼のできるタチヤーナがいたからかもしれない、とそ

のとき思った。
当直室のソファで、タチヤーナ・マ

マは日本から送られた抗がん剤の注射を、子どもたちに気がつかれないようにこっそりと始めた。抗がん剤の副作用の嘔気をがまんしながら、あいかわらず彼女は、病棟を走りまわった。

私の子どもたちのために 生きぬくわ

3カ月後、ベラルーシ共和国を訪ねると、いつものあたたかな笑顔の彼女が、ゴメリ駅に迎えに出てくれた。ウエーブのかかった美しい金髪がストレートの髪になっていた。抗がん剤のため髪がなくなってしまう、カツラになっていたのだと思った。美しい顔が少しだけやつれていた。つらいだろう。乳がんは他のがんに比べると転移が広がっても、抗がん剤がよく効くところがある。タチヤーナはあるがままを受け入れていく。厳しい状況はこれからも続くことだろう。しかし、あきらめていない。希望を捨てていない。

「元氣かい」と聞く。「元氣よ。私の子どもたちのために生きぬくわ」明るい答えが返ってきた。ぼくはそれ以上、彼女の病気に触れることができなかった。ブラットホームでそっと抱きあった。彼女の命をいとおしいと思った。奇跡がおきた。抗がん剤が効いて彼女は元氣をとりもどした。白血病病棟で、フルタイムで働きはじめた。

脊髄にも転移

しかし、幸せな時間は長く続かなかった。昨年、元氣に小児白血病病棟を飛び回っていたタチヤーナの悲しい知らせが入った。再び、がん細胞が猛威をふるい始めた。首の骨へがんが転移しているという。脊髄にも転移がおよんでいた。悲鳴が聞こえた。ひどい。なんて残酷なことをするんだ。両側の手足がまったく動かない。四肢麻痺、完全に寝たきりになってしまったという。

ぼくは、どうしても彼女に声をかけてあげたかった。ゴメリ州立病院へ飛んだ。タチヤーナ先生は、ゴメリ州立病院の移植部集中治療室に入院していた。自分のホームグラウンドだ。ここで彼女は、たくさん子どもたちの命を救うための闘いの陣頭指揮をとってきた。

入院している白血病の子どもたちと子どものお母さんだけではなく、若いドクターたちの心の柱だった。みんなから慕われていた。

ニコニコしている。タチヤーナ先生の笑顔は変わっていないかった。不思議な気がした。どうしてこんなにニコニコしていられるのだろうか。

「ドクター・カマト、よく来てくれました。とてもうれしい。遠いから大変だったでしょう」

わずかに動く手をさし出してきた。握手の力はないが握れる。放射線の治療が効いてきたようだ。回復の成果を

ぼくたちに見せようとしている。「心配で飛んできたよ。タチヤーナがいなかったら、チエルノブイリの子どもたちへの救援活動は、こんなに続かなかった。タチヤーナに元氣でいてもらわなきゃ」

すべての子どもに

チャンスをも!

乳がんには化学療法も放射線治療もよく効く。ここからが勝負だ。完全麻痺だった手足が動き出したと聞いて、安心した。

「大丈夫、負けないわ。カマト先生と会ったのは、9年前だったわね。小児科から白血病病棟を独立させた時だった。私たちは、ドクターカマトがやっているJCF（日本チエルノブイリ連帯基金）と共にこの病棟を作ってきました。人生なんか苦勞の連続。だいじょうぶ、だいじょうぶ」

「ゼロからの出発でおもしろかった。やりがいがあった。1991年、初めてこの病院を訪ねたとき、白血病の少年のお母さんに泣かれてね。少年の名はウラジミール。日本へ連れて

いって、助けてほしいって。あの時、君は毅然としていた。この病棟の子どもたちは、みんなが生きたいと思っている。ひとりだけ日本へ連れていってはダメ。すべての子どもに生きるチャンスを与えて。覚えている? かつこよかったなあ。君の言う通りだと思った。あの時は、反省したよ」

8千キロを超えた家族

この人が病氣であることを忘れてしまいそうだ。ぼくたちは、同い歳の医者として、気があっていた。死にかけている、子どもたちの命を救いたかった。生きたいと思っている子どもたちに悲しみの涙を流させたくなかった。一人でも死なせたくなかった。一人の

子どもの涙は、人類すべての悲しみより重たいというドストエフスキーの言葉をずっとかみしめながら、タチヤーナと協力しあいながらやってきた。

「あの時の、日本へ連れていって治療してくれて言った八歳の少年ウラジミールが、ぼくのことを覚えていてくれ、十年ぶりに再会した。日本から送った薬をタチヤーナが、上手に使用して完治させた。うれしかったなあ。お母さんにアパートに招待され、手作りの家庭料理を味わってきた。おいしかった。ホテルの料理はいつも同じ。あきちゃってね。ぼくはバスタが好きってお母さんに言ったら、お母さんが手打ちで作ってくれた。手打ちバスタ、すごいって言ったら、この国は機械なんかないから、いつでも手打ちですって、言われてしまった。なんだか知らないけどうれしい。うまかった。

なんか、ぼくたち、8千キロを超えた家族みたいじゃないかって思った。

ぼくたち、いい仲間になった。お互いを信頼してきたね」
タチヤーナは美しい顔に満面の笑みを浮かべた。
「この国は経済が崩れて大変。でも、病氣にかかった子どもたちに国の経済は関係ありません。みんな治りたいです。医師として、全力を尽くしたいです」

本当の優しさとは

人間の心をもった、すばらしいドクターだと思った。

彼女は熱く、強く、優しい心を持っている。ぼくは、人間にとって大切なのは他者への想像力だと思っている。他者がどんなにうれしい思いをしているのか。何をしてもらったらうれしいのか。何を待っているのか。時代の進歩とともに、科学的な根拠の向こう側に、もっと大切な心とか魂があるのに、そのことに、だれも気がつかなくなりはじめた。



「私のことを待っていてくれる人がいるって、幸せ。元気になるそんな気がする」
 ぼくは、胸が熱くなって、声が出ない。黙ってタチヤーナの手を握った。生きていてもらいたいと思う。もしかしら、もしかしたら、もう生きて会

かわいそう」

「先生、だいじょうぶ、だいじょうぶ。子どもたちすごい。私を乗りこえていく。入院している子ども、一人ひとりが、私に手紙をくれました。小さな子どもたちも、お姉さんたちが教えたんだと思うけど、手紙を書いてくれた。何て書いてあると思う？」

「なんだろう」

「子どもたち全員が『タチヤーナ先生、今度は、私たちがついていて。だいじょうぶ、だいじょうぶ。早く帰ってきてください。待っています』泣けたわ。うれしかった。こんな手紙もらったの初めて。私の口ぐせを知っているの。やられたわ。私の子どもたちのためにも、私は死ねないわ。もう一度元気になるって、子どもたちが待っている、病棟に戻らなくちゃ」

すごい。顔から笑みがあふれている。

子どもたちは、タチヤーナから愛されていることを知っている。みんなが

一度はタチヤーナに抱きしめられていく。

白血病の子どもたちは、化学療法の薬を投与されて、苦しうって泣くこともある。夜中にさびしくて泣くことで生きているんだ。タチヤーナのようなお母さんが必要なんだ。

タチヤーナは「がんばれ」とか、「がんばって」と、尻をたたかない。「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と、丸ごとを引きうけてくれる。子どもたちも、タチヤーナから大切なことを学んだ。

「私たちがついていていい言葉、なあ。なんとかなるさ。世の中、そんなに捨てたもんじゃあないって感じでした。」

奇跡よ再び！

タチヤーナに再び奇跡は訪れるのか。

えないかもしれない。

「ダスビダーニヤ」ぼくは声をかけた。「さようなら、ありがとう」タチヤーナは日本語で答えてきた。「タチヤーナ、生きろ。君がいることが大事なんだ。この放射能で汚染された町で、不安のなかで生きる子どもたちにとって、君の笑顔が必要なんだ。生きろ。生きていてくれ」ぼくはそっと、手を握りつづけた。

それから、4カ月後、うれしい知らせが届いた。タチヤーナが半日、病院に復帰したという。奇跡が再び訪れたのだ。

子どもたちの思いが通じた。
 「だいじょうぶ、だいじょうぶ」ぼくは、おまじないのような呪文を、ベラルーシの方を向きながら、ひとり、心のなかでつぶやいた。

「ダスビダーニヤ」

いつまでも奇跡は続かなかった。悲

しい知らせが届きました。信じられないような知らせ。

「タチヤーナが死んだ」

いつだって君は奇跡を起こしてきました。二十世紀の文明がつくってしまつたチェルノブイリという人工的な荒地に、き然と立ちはだかつていません。いつだって、かつこよかつた。君は子どもたちの命を守るために、勉強をして、優秀な医者になりました。よくやつたと思います。

あなたは、病棟で泣いている白血病の子どもたちのお母さんでもありません。あなたの「だいじょうぶ、だいじょうぶ」という言葉をもう聞くことができなくなりました。寂しいです。あなたは、食べ物のない子どもたちのために畑を耕しました。病棟の子どもたちの、信頼できるドクターであり、お母さんであり、お百姓さんでもありません。ぼくらは忘れません。あなたが口

特集 2

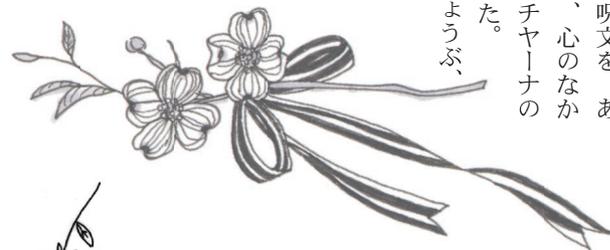
第 74 次訪問団報告



1月1日、ゴメリ州立病院小児血液病棟は、国立放射線医学人間環境センターに移転した。第74次訪問団は、今後のJCFの医療協力をデザインする大切な渡航となった。
新しいセンターで、どんな診断・治療ができるのだろうか？
早朝の厳しい冷え込みに、吐く息は白く、駆け足で松本発の一番列車に飛び乗った。

癖のように子どもたちに言った言葉、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」
21世紀になって、ぼくらの地球で、わずかな間に二回も戦争がありました。環境破壊も、さらに進んでいるように思います。地球はちっとも大丈夫ではありませんが、子どもたちにとって、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と言えるような世界をつくらないといけない。あなたの志を伝えていかなければいけないと思っています。
12月29日、あなたが、この世の最期の息を引きとったと、今、聞きました。茫然としています。悲しいです。君だからこそ、また、奇跡をおこすと信じていました。
12月中旬、双方向テレビで、君は、再び、入院しているけど元氣だと聞いて、復活を信じていました。残念です。でも、たくさん人間がこうやって生きて、生きて、死んできました。こうやって、この世を去っていくので

しよう。あなたの声も、あなたの顔も、あなたのちよつとふくよかなスタイルも、身のこなし方も、あなたの考え方も、すべてが、子どもたちに優しかった。
「タチヤーナ先生、ご苦労さま。ぼくたちよくがんばってきたね。ありがとう。さよなら。ダスビターニャ」
ぼくは、おまじないのような呪文を、あの世へ向きながら、ひとり、心のなかでつぶやいた。かすかにタチヤーナの声が聞こえたような気がした。
「だいじょうぶ、だいじょうぶ、私がついている」



これからも、タチヤーナ先生の遺志を継いで、白血病の子どもたちの命を支えていきたいと思っています。御支援をよろしくお願いします。





支援の形態は変わっても 13年の信頼関係による協働は続く！

神谷さだ子（JCF・事務局）



ゴメリ州立病院小児血液病棟が新センターに移転し、JCFとの13年間の協力関係が、途絶えてしまうのではないかと懸念もあった。しかし、新センターへは、病棟で働いていた医師、看護師、支援した機器、子ども達のプレイルームと食堂のセットすべてが引越した。ことに、スタッフは、タチヤー

ナ・シユミヒナ先生を尊敬し、これまでのJCFとの協力の下で、病気の子ども達のために尽くしてきた人達だ。彼らは、皆、小池先生の訪問を待っていた。日本からのアドバイスを受けながら、このゴメリでできる治療を続けていきたいと願っていた。

13年間の医療協力によって培った信頼関係は、変わることがなかった。身体全体で、この思いを受けとめた時、支援の形態は変わっても、けっしてこの協働が途絶えることはないだろうと、静かに実感するのだった。

◎国立放射線医学

人間環境センター

・カピタノーワ・エネオノーワ
センター長との話し合い

センターは、チエルノブイリ原発事故による晩発性障害について調査研究することを目的に設立された。小児血液科では、30人の子ども達が入院して

いる。成人血液科と共に、末梢血幹細胞移植の治療をここでも行う。医薬品は、保健省直轄なので、申請すれば購入してもらえる。しかし、日本からの支援機器の消耗品などを援助してほしい、と依頼された。ただ、ファックス・キャンだけは、他の施設に移されたが、すでに、新機種を発注しているのとのことだった。

・小児血液・成人血液科のスタッフと今後の協力関係について話し合い

ミンスクの小児血液がんセンターに問い合わせたが、診断のつかなかった患者が2人いた。ぜひ、診てほしいとのことで、診断とカンファレンスが始まった。センターの検査室や病棟を見学すると、最新医療機器が揃っている。しかし、とてもこれらの機器を使いこなせる段階ではないことが見てとれる。今後は、医療情報伝達と具体的なアドバイスによって、スタッフ教育にシフトしていくことになるう。

・衛星通信システムの設置

移転時のまま積み上げられていた通信システムが、再び開通した。センターの8人の強力技術者、日本で遅くまで待機してくださった日本無線の菅田さん。仕事は万全だった。これまでと同様に、隔週の通信で、さまざまな情報の交換が可能になる。





新センターで小児血液科の医師と小池先生

彼らに添って、共にチェルノブイリに向き合うことで、ささやかながら目に見える成果が上がった。13年という月日は、明らかに支援形態が転換期を迎えたことを告げた。しかし、そこには変わらぬ信頼感がある。医薬品や医療機器を贈ってきた、これまでの支援から、医療情報の伝達、アドバイスをするソフト医療支援にかわっていくことになる。

そこに、信州大学の科学調査への試みは、チェルノブイリの風化に一矢を報い、支援する市民団体への指標になるのではないかと思う。



小児血液がんセンターで 日本から贈った薬品で回復したウラジミール君

◎ゴメリ州立病院
 ・カシム院長、ガリーナ臨床検査室主任と次年度の協力について話し合う。
 附属産院を改修する計画がある。イスからも支援があるが、一過性なので、新生児についての診断治療についてJCFからの支援をお願いしたい。検査試薬は、ベラルーシで買えるものがいい。保健省に申告して、こちらで購入する、と言われた。一時期「JCFの支援がなければ、仕事ができない」とまで訴えられたが、医療システムが整ってきたのだろうか。この言葉からも、注射器も顕微鏡のガラスさえもなかった10年前とは格段に変わってきた。JCFの支援形態の転換期でもあることを感じた。

中古の機器は必要ない、と改めて言われた。中古機器支援は、昨年同様、医師や検査技師と共に、支援目的をタイトにしていくことにする。

◎ゴメリ医科大学・
 小児血液がんセンター
 妊婦の胎盤のセシウム測定調査、小児がんとストロンチウムの関係の調査など、今年度から信州大学医学部小児医学科が着手する。

また、昨年、マリア・クリシタポーピッチさんのために緊急に送った医薬品が、残念な事に彼女には使われることはなかった。しかし、その薬を使って、元気に回復した14才のウラジミール少年がいた。付き添っていたお母さんからも「日本の薬は素晴らしい。先生も副作用が全くない、と言ってたわ」と感謝していただいた。

原発事故に対して、何をどうして良いか解らなかつた現地の専門家。日本からの放射線物理学、医療の専門家が

スローライフと衛星通信と信州大学病院



放射線医学人間環境センター

滝沢正臣（信州大学医療情報部）

2年ぶりのゴメリの町は一見前と何も変わらないように見えた。しかし車の増加、町が明るく、そしてホテルのお湯と部屋の温度は快適となった。遅くはあるが確実に社会はすすんでいる。変らないのは人々の笑顔のないこと。

ベラルーシにおける医療社会の仕組みは複雑で我々の意識の外にある。ゴメリ州立病院に蓄積された小児白血病の骨髄移植は信州大学病院小児科が持つ高い医療技術の支援に支えられ、再発がなくなるなど、高度な水準となった。それが突然？、かどうかの判断はできないがチームは分解し、移植を分担した医師は環境センターに移動し、これに伴って衛星映像通信システムも環境センターに移転して利用したいとの要望が日本にきた。

放射線医学人間環境センター

新しい国立センターはゴメリ市郊外

の松林の中にひっそり建っていた。5年前に訪れた時にはコンクリート打ち放しのむき出しで、何時完成するかも分からない、ということであったが、今回訪れてみると堂々とした建物が完成し、ミンスクの国立小児血液腫瘍センターのようなカラーデザインこそなかったが、玄関前のコンコースなどの広々とした前景と建物との調和は瀟洒で医療施設らしいイメージはまったくない。

設置事前調査のため2月29日環境センターを訪れた。イーゴリ先生はまるまるとふくよかに大きくなってにこやかに出迎えてくれた。センター長のカピトノフ先生は実年の女性で穏やかな印象であったが、我々とのミーティングに望んでたたちに担当の医師や関係者を集め、必要な指示をあたえるなどテキパキとした方であった。この国では女性の医師、技師が男性を圧倒している。

遠隔医療機材

センターの強い要望で遠隔医療システムの稼働させることが今回の訪問での主目的の一つであった。予算上の問題もあり、メーカー派遣が難しいので、限られた2日以内にアンテナを設置し、インド洋上のインマルサットとの通信を可能にした上、日本との映像会議を再開することはかなり重い課題で冒険とも思われた。しかも、移動に伴う機材の解体や梱包は現地の医師や作業員が行っていたため、紛失や破損の可能性も無視できなかった。

アンテナの設置

かつてゴメリ州立病院4階外のベランダに小さくなっていたなつかしい衛星アンテナに3階の廊下で再会した。どうやら傷等はなく大切に運ばれたことが伺われた。通信機やテレビ会議装

置は医師室内におかれていたが、イーゴリ医師の話では設置する部屋の決定が翌3月1日とのことであった。すぐにも組み立てたい気持ちを抑えて事前確認を行う。

3月1日はゴメリ州立病院カシム院長への表敬訪問を終えてセンターで作業を開始したのは11時過ぎであった。4階へのシステム設置場所を確認した上でアンテナ設置場所の選定にはいた

で10階屋上に設置することとした。作業には神谷さんが常についてくれるので言葉の問題もなく作業が進んだ。

ゴメリの男たち

これからたくましい男達のめざましい活躍がはじまった。80kgのアンテナを手で支え階段をかついで持ち上げる。冷たい雪まじりの風が吹き抜ける屋上からさらに屋上へと長いはしごで

た。担当の若いハインサムなワシリーさん、7名の作業員が集められた。業者でなく職員による作業を行うようである。最初選

んだ4階屋上は、東南側に10階のビルが隣接していて衛星電波の障害になりそうだったの



特集 3

「永井隆平和記念・長崎賞」受賞



永井隆博士の娘さんの筒井茅乃さん（右）

JCFは長崎・ヒパクシャ医療国際協力会（NASHIM）が主催する「第5回永井隆平和記念・長崎賞」を受賞、2月13日長崎市で授賞式が行われました。



成功を喜ぶ小池先生、ピクトル先生、イリーナさん、滝沢先生

のような作業は日本の病院ではすべて業者が行っている。アンテナはコンパスで確認し設置が終わったのは午後3時過ぎであった。

うまく動くか？

設置機器は、電源が230V、100Vと混在していて確認が大変であったが、通信—テレビ会議装置の接続は2時間程度で終わった。幸い不足の機器やケーブルはなかった。さて、慎重に電源を入れる。テレビ会議関連装置や顕微鏡、書画カメラは問題ない。しかし、通信システムは立ち上がったが電波が受信できず感度が0である。アンテナ位置は十分確認したが通信できない。奮闘したがためなのでこの日は時間切れとなり、午後7時に作業を終えた。

成功！

翌日となった。午後にはミンスクに向けて帰途につかなければならな

い。日本無線に経過を連絡し相談した。芦田さんはアンテナの方位を聞いた。273度の方向であった。もしかするとゴメリ州立病院での設置方位に固定されたままなのかもしれない。そこでジャイロにより0度に修正してみた。感度が上がった。11時に日本をコールした。信州大病院遠隔診療室が見えた！動いた！ついに成功した。イーゴリ先生と信大病院医療情報部坂田先生との初交信が行われた。小池先生、ピクトル先生、神谷さん、通訳イリーナさん、皆喜ぶ。

昼のビールが旨かったことはいうまでもない。JCFの皆さん、日本無線の皆さん有り難う。このシステムが新しいセンターでの難病制圧に少しでも役立つことを祈りたい。

ゴメリ地方に春を告げる青空が広がる中ミンスクへの帰途についた。しかし北の首都ミンスクはまだ深い雪の中だった。

持ち上げる。これらをすべて手作業で行い10階屋上にすばやく上げてしまった。日本では重機使用以外には考えられないことであった。またアンテナケーブルを新しい部屋をガリガリ貫通して設置し、後を化粧モールできれいに修復したのもこの男達であった。こ



永井隆

その志は今も人々の勇気

1945年8月、長崎医科大学で原子爆弾により重傷を負いながら、被爆者の救護活動に挺身した永井隆博士は「長崎の鐘」等多くの著作を発表し、祈りと平和を訴え続けた。その崇高な平和希求の精神と活動は、今なお、多くの人々に感銘を与えている。

太平洋戦争も激しい昭和20年（1945）6月、永井隆博士は白血病に侵され余命3年の診断を受ける。1945年8月9日11時2分、世界が真っ白い光りにつつまれ、すさまじい爆風と共に超高熱が走った。米軍機から長崎に原爆が落とされたのである。博士はこのとき、爆心地からわずか700mしか離れていない長崎医科大学の研究室にいた。あいつぐ空襲で負傷した患者であふれた教室で、自らの白血病と闘いながら診察中の被爆だった。

多くの研究資料が灰となり妻を失い、絶望感に打ちひしがれた博士は、目の前の新しい現実に立ち向かわねばならないことに気づき、救護活動に立ち上がった。そして新たな課題、まだだれも研究したことのない病気、原爆症の研究が待っていた。おびただしい原爆症患者、あいつぐ死亡者。なんと

か助きたいという思いで患者を探し歩き診察したが、とうとう自らも危篤状態におちいり、無念にも救護活動打ち切らざるを得なくなった。

床に伏せた博士は、ベッドの中から原爆症の研究と執筆活動に入る。昭和23年春、如己堂が完成した。一面焼け野原となり消えた町は麦畑に変わり、やがてバラックが建ちはじめ人々が浦上に定住し始めるころ、如己堂は浦上の人々や教会の援助により建てられた。この小さな庵は聖書の一節「己の如く人を愛せよ」という言葉により如己（によこ）堂とされた。

このわずか二畳の部屋の中から博士は次々と名作を生み出し、浦上の人々を上げまし続けた。「この子を残して」は映画化、『長崎の鐘』はレコード化され、戦後の名曲として今に歌い継がれている。

博士には誠一（まこと）と茅乃（ちの）という二人の子供がいた。子供たちは疎開

先で原爆の難をのがれた。博士は、母親を失いやがて孤児となる二人の運命を案じていた。その思いや愛が、後に数々の名作を生み出す原動力となる。一日でも一時間でも長く生きてこの子の孤児となる時をさきに延ばさねばならぬ。一分でも一秒でも死期を遅らしていただいて、この子のさみしがる時間を縮めてやらねばならない。」

「私が眠ったふりをしていると、カヤノは落ち着いて、ほほをくつつけている。ほほは段々あたたかくなかった。何か人に知られたくない小さな宝物をこっそり楽しむようにカヤノは小声で、『お父さん』といった。それは私を呼んでいるのではなく、この子の小さな胸の奥におしこめられていた思いがかすかに漏れたのであった。」（永井

隆著「この子を残して」より）

昭和26年5月1日、二人の子供たちが看取る中、かつての職場である長崎大学付属病院で博士は力強い祈りの声の後、静かに帰天した。（享年43歳）

「こ」から見ていると、誠一は瓦のかげらをもつて担いで捨てに行くところ、カヤノはつるばらの花を有田焼のかげらに盛って独りまごごとをしている。この兄妹が大きくなってから、私の考えをどう批判するだろうか？五十年もたてば、今の私よりずっと年長になるのだから、二人寄ってこの書をひらき、お父さんの考えも若かったのう、などと義歯を鳴らして語り合うかもしれないな。」（この子を残して」終章）

永井隆博士の崇高な平和希求の精神と活動は、今なお多くの人々に感銘を与えている。

（長崎市平和推進室及び長崎原爆資料館ホームページより）





기자레-차: 出会い ВСТРЕЧА

長崎受賞の旅

永井隆平和記念・長崎賞の授賞式が2月13日に行われることになり、鎌田理事長と事務局スタッフも授賞式にお招きいただきました。

以前JCFセミナーで講演して下さった長崎大学医学部教授の山下俊一さん、JCFの紹介パンフレットやグランドゼロを館内に展示して下さっている国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館職員のみなさん、今回の受賞に際して大変お世話になった長崎県庁の草場さんやみなさんにお会いしたい、あこがれの長崎観光もできたら、と神谷さんと私はちよつど11日が祭日ということで、前倒し出発をしました。

今回は会員さん訪問を一回お休みさせていた、だき、この長崎への旅での出会いを書かせていただきます。

私が長崎に出かけると聞いて、ある知人が、「長崎か、いいねえ、僕も以前行って

すっかり気に入りました。カクレキリシタン、からゆきさん、そして被爆街に入るとそういう悲劇性を感じて胸が熱くなるんですよ。そしてすばらしく美しい海！僕はついでに住処は長崎と決めてます」

街に入っただけで人の胸を熱くする長崎ってどんなところなんだろう！こうしていやが上にも高まる期待とともに長崎に出発したのでした。

長崎空港にはお忙しい中を山下先生が奥様の真理子さんとお迎えに出て下さり、途中魚市場に寄って、松本ではお目にかかることのない、「なまこ」などを仕入れて、素晴らしい眺めの海付き山荘に案内して下さいました。お宅の中には山下先生のヒバクシャ支援先、ベラルーシやウクライナ、カザフスタン、などの民芸品や工芸品、楽器などが奥様の素敵なおセンスで飾られ、シルクロードに迷い込んだようです。おなじみのマトリョーシカも山下邸で



魚市場で神谷さんと山下真理子さん

出会うと何だか違って見えます。

吹き抜けになった二階には卓球台があつて、さつそく山下×神谷対決です。張り切つて挑戦した神谷さんはしばらくぶりの卓球に最初調子が出ず、山下先生に「動体視力低下は老化の印」だとからかわれます。ひと汗かいた後は私にとっては生まれて二度目のなまこを肴にビールで乾杯、お話はやっぱり今後のベラルーシの医療支援についてになりました。山下先生は「以前に比べて物は豊かになってきたけれども、それを使う医師や技術者の教育というソフトの面に関してはまだまだこれか

らだ」とおっしゃいます。

車窓に広がる長崎湾の夜景を楽しみながら、宿まで送っていただき、何だか遠くに来てしまった気がしないのは、山下ご夫妻の暖かなおもてなしのせいなのでしょう。

二日目はせつかくの長崎お上りさんというところで、午前中は「グラバー邸」の観光。

長崎では自転車を見ません、とにかく坂の街なので、自転車は実用的でないらしいのです。このグラバー邸も急坂の上にあるので、観光案内によると、斜行と垂直のエレベーターに乗って行くらしい。観光客用のエレベーターを想像していたら、スーパの買い物袋や仏花を持った見るからに土地のおばあちゃんが乗り込み、海援隊の「贈る言葉」のまんまの会話が始まった。「今日はぬつかたい、お墓参りにこいば買うたけん、歩かんとこげんして



長崎の人は東洋人以外の外国人をす

エレベーターに乗るとつと。」(うる覚えの方で、長崎の方ごめんさい)

どうやら坂の途中の家々の方が生活にも利用するエレベーターらしい。その地の言葉を聞くのと急に遙々来たぜつ、という旅人の気持ちになります。



水をたたえた水盤の下に追悼空間がある

べて「オランダさん」と呼んでいたという、そのオランダさんの生活の標本「グラバー邸」を見て、「国立長崎原爆

死没者追悼平和祈念館」に向かいます。

この祈念館の銘文には、「国として、原爆死没者の尊い犠牲を銘記し、追悼の意を表すとともに、永遠の平和を祈念するために設置し、原爆の惨禍に関

する人々の理解を深め、その体験を後代に継承するための役割を担っている」とあります。祈念館は広島及び長崎に設置され、「平和祈念。死没者追悼」 「被爆関連資料・情報の収集及び利用」並びに「国際協力及び交流」の三つの機能を持ち、特に長崎の祈念館は「国際協力及び交流」を特徴にしています。そのために設立にあたってはJCFの活動の紹介にも力を入れていただき、交流ラウンジにはグラランドゼロのバックナバーも展示されていました。電話やメールでいろいろと連絡して下さった職員の方と、今日はじかにお目にかかり、館内を丁寧に案内していただきました。

施設の最上階である一階には原爆死没者の方々が求めた「水」をたたえた水盤がおかれ、夜になると光ファイバーにより推計原爆死没者の数—約7万—の追悼のあかりがとまります。地上にあるのはこの巨大な水盤だけで

手記展示コーナーや追悼空間、交流ラウンジなどの施設はすべて地下にあります。そこではいたるところに水が流れ、追悼へ誘う水音がしています。追悼空間には空に向けて伸びる12本の柱があり、その正面には原爆死没者の氏名を記した名簿が納められています。そして柱と名簿棚を結ぶ方角には原爆落下中心地・グラランドゼロがあります。この追悼空間に入場する前室には6個のモニターが縦3列横3列に並ぶ大画面があり、原爆で亡くなった方の遺影とお名前が次々に表示されます。「原爆死没者」というひとくくりではなく、お一人ずつの、名前と顔を持った「人」と向き合う時、何とも言えない圧倒的なものを感じました。原爆のもたらした「死」の大きさにやっと少しふれることができたような気がしました。昨年、祈念館を訪れ、平和メッセージを残したという小泉総理は、この遺影の前で平静でいられたのでしょうか。

総てが整然と美しく、まるで現代のピラミッドを思わせるような祈念館の中で、その名前を持った写真だけは封じ込められない「言葉」として私に迫ってきました。

2月13日、いよいよ授賞式の日がやってきました。

今日も素晴らしい晴天！
授賞記念講演と式典は午後からの



ド・口神父像の下で鎌田夫妻と布山

で、午前中は山下先生が、昨夜東京での会議を済ませて駆けつけた鎌田理事長夫妻と私を、外海へご案内下さるといいます。

長崎の外海は江戸時代迫害にあったカクレクリシタンの里として知られ、遠藤周作の文学の原点とされる『沈黙』の舞台となったところでもあります。

遠藤周作夫人が鎌田理事長と懇意なこともあって、外海にある「遠藤周作記念館」は鎌田先生も楽しみにしている場所でした。あいにく記念館は大型観光バスが停まって大混雑だったので、その前に素敵なところに行きましよう、と山下先生が急な坂を登って行きます。着いたところは「ド・口神父記念館」。

ここは1868年長崎に渡来したフランス人宣教師マルコ・マリ・ド・口神父の深い人間愛とフロンティア精神を記念して1978年に建てられたものだそうです。神父様がフランスか



シスターのオルガンに合わせて歌う鎌田夫妻と山下先生

ら持参して演奏していたというオルガンを演奏する、85歳の橋口シスターがいらっしやいます。シスターは年齢を全く感じさせないちんまりと可愛い方で、オルガン演奏に合わせ、美しい声で賛美歌を歌って下さいました。偶然にもその賛美歌はクリスチャンだった鎌田夫人のお父様が亡くなる前に歌っ



鎌田理事長とシスター

た賛美歌だったのです。

「神父様を称えて最近作られた曲があるの、もう一曲みんなで歌いましょう」

シスターの提案で楽譜が配られ、シスターと山下先生の美声（先生は先祖代々のクリスチャンだとか）につられて「ド・ロさまの笑顔」という曲をみんなで歌いました。

（…安らげる憩いの場 信じあう希望を 小さくても 今すぐにできることをはじめよう 弱くても すぐそばでできることを 始めよう…）
歌い終わって山下先生がニコニコと

おっしゃいます。

「いい歌ですね、この歌はまるでJCFのための歌じゃないですか！」
盛り上がる私たちに、ちよつとびつくりした顔で私達のことを尋ねるシスター。山下先生が、「この先生は『がんばらない』という本を書いた有名なお医者さんです。長野県から『永井隆賞』の受賞式に見えたんですよ」

シスターは永井博士は良く知っているけれど、永井隆賞は知らないという。長崎出身の歌手さだまさしさんが鎌田先生の病院でコンサートをする話をして、「さだまさしは知らないけれど橋幸夫はこの記念館にきました。」と生真面目に外すシスターに一同爆笑でした。

記念館から遠藤周作記念館に戻るとさっきの喧騒が嘘のように静かな館内です。物語を追って小説『沈黙』のキーワードが展示され、展示の途中にある「窓」からは、まるで切り取っ

たような外海が挿絵のようです。学生の頃、何かしつくりこない気持ちで読んだ小説『沈黙』が、この地でこんな風に語られると、もう一度、是非読み返したい作品になっていきます。禁じられた宗教、伝導した宣教師は捕らえられ、総ての教義は書き言葉ではなく人々の胸の中だけにしまわれて、それでも「神」を、信じることを伝え続けていったカクレキリシタンと呼ばれる人々、その人々の前で「沈黙」する神、この外海の地の、どこまでも蒼い海の前で、周作の小説は今も重い。

明るく可愛いシスターと遠藤周作の作品と、様々な想い出を乗せて山下先生の運転する車は授賞式の会場へと向かいます。

受賞記念講演は、昨日訪れた祈念館に隣接する原爆資料館のホールで行われますが、その前に永井隆氏が最後の



永井隆記念館で茅乃さんの説明を聞く

絵のイメージ通りの、美しく柔らかな雰囲気の方で本で見た「茅乃」さんがそのままそこにいらつしゃいました。

原爆資料館での鎌田理事長の講演には平日にもかかわらず、鎌田先生の著書を読んだファンが大勢駆けつけ、お話の佳境では会場のそここですすり泣く声も聞こえました。

会場を変えての授賞式には長崎県知事始め沢山の方からお祝いの言葉をいただき、今回の受賞の推薦者でもある信州大学の小宮山学長も遠路お祝いに駆けつけて下さいました。

茅乃さんからは花束に添えて、「父が長野県内での学会に出席したとき、列車の車窓から見た茅葺きのある風景がとても気に入ったそうです。『茅野』（ちの）というところだつたそうですが、あまりにも気に入ったので、生まれてきた子どもの名前を『茅野』と付けることにしたそうです。そ

の際、野原の『野』ではありふれているので、乃木大将の『乃』の字を借りて『茅乃』（かやの）というふうにしたと、兄が亡くなる数年前に兄から聞いたことがあります。

今回、永井隆平和記念・長崎賞を受賞した日本テイルノブイリ連帯基金の理事長さんが勤務されている諏訪中央病院が茅野市にあるというのも何かのご縁のようなものを感じます。」

また山下先生からは「長崎がヒバクシャ支援に関わるのはある意味当然です。山の中の長野県のJCFがテイルノブイリのヒバクシャ支援を息長く続けていることは、とても意味のあることです。実は今日、原爆の近距離被爆を受け肺がんの末期で苦しんでいる患者さんから鎌田先生にヒバクシャの思いを伝えて欲しいと託されました。それは『長崎の祈り』です」という印象

執筆活動を続けた「如己堂」と永井隆記念館を見せていただきます。如己堂は本場に小さく、ここで晩年の沢山の作品が書かれたと思うと感無量です。如己堂のお隣の永井隆記念館で、館長で、永井博士のお孫さんの永井徳三郎さんと娘さんの筒井茅乃さんにお会いしました。茅乃さんは博士の書かれた



いたメールをみなさんにも読んでいただくと思います。

長崎への旅は、これからのJCFの旅の始まりだったと思うから…。

布山さん

メール有難うございます。今キエフに戻り暖かいシャワーにホッとしているところです。JCFの素晴らしいところはベクトルの異なるボランティアをまとめこの10年以上チェルノブイリの現地へ直接支援の手を差し伸べられている点です。私と同じ戦友とっています。ですから今回の受賞は我が事のように大変嬉しく自然と長崎の皆も同じ感情を持ったと思います。とても長崎と信州が近く思えます。たてしよ。風化しつつあるチェルノブイリ、経済や社会のインフラが崩壊した旧ソ連での保健医療の建て直しは10年単位で考えなければ改善の兆しは見出せません。昨日

も天江大使と話をしましたが、官公

民でのプロジェクト形成や推進は国際協調と同様で難題山積です。まず人材の育成と正しい知識と良心での行動が現地でも又支援する側でも必要です。個々の力は弱いでしょうが、JCFの素晴らしい人材を活用されて、意義のあるそして真に必要なことを事業展開されんことを期待しています。予算規模の問題ではなく、何を目指し苦楽を共にするかどうかです。釈迦に説法でしたが、曲がりかどは私もたくさん経験して現在に到っていますので、どうぞがんばらない、とあきらめないの精神で益々JCFが心を一にして一瞬一生の仲間が増えんことを祈念しています。また11月25日には鎌田先生のお話を楽しみにしています。どうぞ皆様になしくお伝え下さい。

山下俊一

(事務局・布山)

的なお言葉をいただきました。

出発前に知人から聞いた通り長崎はとても素晴らしい街でしたが、私は悲劇性よりも活動的で明るく暖かな沢山の人々との出会いに満ちた街でした。お世話になったたくさんの方々に、ありがとうございます。

最後に帰松後、山下先生からいた

己の如く



地球上で何百回と繰り返された核実験、戦争で使われた劣化ウラン弾など、放射性物質によって生き物たちは非常な負荷を負っています。「ヒバクシャ」が世界共通語として使われるようになったグランド・ゼロー長崎の地に立って、「ぼくたちは、どこに行こうとしているのだろう」と思いを馳せます。

ぼくたちの立っている社会と環境の有り様に絶望し、得体のしれないものに絡め取られていく不安を感じる今、一人の気骨ある科学者・医師である永井隆博士が、ぼくたちに歩み行く方向を示して下さっています。「たゆまぬ探求と錬磨によって、科学は生きるもの達への安心と安全に寄与すること」、「慈しみあう心につながれた個々の生きる営みが、地上に満ちること」と。

第5回「永井隆平和記念・長崎賞」を受賞する栄誉をいただき、チェルノブイリの被災地で出会い、闘い、信頼を深めた方々皆で8000キロの時空を超えて、喜び、励まし合っています。

チェルノブイリ医療協力を通して学んだたくさんの方の事を、永井隆先生の指し示すところに活かしていこうと思います。長崎からのエールに応えるべく、歩んで参ります。ありがとうございました。

JCF理事長 鎌田實



健診の日が近づいてきました

笹田 海
(ナージャの輪)

近頃命に関する出来事が多くなったと感じます。戦争や病気、特に伝染病は、日本でも発症してしまいましたね。そして、発症してしまつたときのモラルの悪さも問われています。私たちも、そんなモラルの無い人たちが犯してしまつた事故の被害者なのです。

そして、今年も健康診断の日が近づいてきました。我が家にも、その知らせのチラシが新聞折込にて入りま

した。それには、この健診は、身体には影響は無いはずだけれど、不安になっている人のためにするものだと、書かれていて、健康診断は、当分の間だけ行うとあります。私たちは、いつまで続けてもらえる

実の中にいたのです。これからも頑張つてほしかった。頼りにしていただだけに、とても悲しいです。

やはり、原発の議員は、何かが起きない限り市民から支持していただけないのかと。隣町に住んでいるから、一票の力が無い：ことが悔しいです。悲しいけれど、これが、現実なのか

もしれませんね。将来に対して、私たちには何ができるのか？

できることを仲間です話合つて、していこうと努力しています。いまは、今年の健康診断の呼びかけをして、受診者が減らないように、そして、継続して健診することの意義を、知ってもらおうとやっています。

私たちお母さんのグループでは、オ

のか分からないとの、心配の中で毎年迎えています。

ある人からは、受診者が少なくなつたら、すぐにでも打ち切る考ええているようだと、聞きました。

実際に、毎年これだけの内容を個人負担でしていたら、とても経済的に無理な家庭が、多いと思います。

なので、これからも一生続けてほしい、と思つています。私たちの、「最低限の権利だ」とも思つています。

さて、今年の東海村議会の選挙では、相沢さんが落選してしまいました。毎年の健康診断のやり方や、健康に関する要望や、脱原発に対する意見などを、議会に届けていただいて、「二人三足」などと、とてもさびしくて：厳しい現

フサイトセンターの見学会を計画しています。

どういうところか、行つてみたいのとあまりにも知らない人が多いことを知つて、あんな事故があつたのに：と、驚きと、残念とで、叫びたいくらい悔しいです。

でも、原発事故に対する不安は誰しも持つているようです。せめて、参加していただけなくても、見学会のチラシを見ていただいて、少しでも関心を持ち続けてくれれば：との思いで、多くの方に配りました。

皆さんのところには、オフサイトセンターございますか？

オフサイトセンター

原子力災害対策特別措置法に基づき、原子力施設で緊急事態が発生した際、国の「原子力災害現地対策本部」や都道府県および市町村の「災害対策本部」などが「原子力災害合同対策協議会」を組織し、情報を共有しながら連携の取れた応急対策を講じるための拠点施設。



茨城県原子力オフサイトセンター（同センターホームページより）



写真提供 本橋成一

壊れた陶器の欠片どうしを継ぎ合わせて一つの完成品に仕上げた「よびつぎ」の姿は、美しくも深い暗示に満ちています。(本誌第五十二号「よびつぎの器」ここに我々現代人が置き忘れて来た「無いものを生かす」「無い中から創り出す」という日本古来の侘び茶の精神を読むことができますでしょう。

孤立無援の窮地から歩き始めた一家族が、図らずして稀有とも言うべき堅固なネットワークを紡ぎ出している。この事実を私は有り難い、また貴い証言として受け止めたと思います。切迫した必要に依っておのずからに生み出される「かかわりのよびつぎ」こそが、公式的な「制度」を問い直して行くのです。



写真提供 本橋成一

最近或る集まりで、とても困難な障害を抱えた身内をお持ちの方がご家族の辿られた苦難の歩みを語られました。予期せぬ事態から若くして寝たきりになられ、西洋医学からは不治を言い渡されました。専門家と言われる医療機関を渡り歩いたあげくに受けた宣告でした。公式的な意味で「頼るべき相手」から見放されてしまったわけです。言うなれば、ご家族は「制度」というものからこぼれ落ちてしまったのです。こうした保障の外で歩み始められた道には、お付き合いやお愛想が介入する余地の無い切実さだけがあつたに違いありません。そしてそんな或る日、次のような思いがけない助言を得たと言っています。

「一つの業種ではとうていこの病気にはかなわないだろう。誠実に仕事をしている人ほど、自分の限界をよく知っている。必ず次に別の領域の人手を紹介してくれるはずだ。そうやって多種多様な関わり手がつながって行くうちに何が見えてくるかもしれないよ。それしかないだろう。」

こう言って、一人の鍼灸の先生を紹介されたそうです。それまで彼女の身体から失われてしまった機能の多さを数えていたご家族に、この先生は彼女に残されている機能呼び覚まし、それを生かす、というまったく新しい道を開いてくれたのです。日々の地道な営みが重ねられてゆく内に、やがて彼女をめぐって不思議としか言えないような無い支援の連鎖が生まれ、考えられないほどの回復を見せながら現在にいたっている、ということでした。

この逸話をお聴きして、私は「よびつぎ」という言葉を思い出しました。

「よびつぎ」という言葉が生まれたのは、地位も職業も教養も、それぞれ異なる人々が、どこからともなく呼び合うように集まって、足らぬところを補いながら一つのものを作りあげて行つたからだろう。(中略) いわば窮すれば通ずるのが「よびつぎ」の文化で、それは人から人へと伝えられて行き、多くの美しいものを生んで行つた。

白洲正子「よびつぎの文化」より

ガニ・タスマガンベトフの ロシア話

◆歯科医院で、看護婦が歯科医に質問する。
—先生、どうしてこんなに嬉しいですか？
—次の患者は、昨日罰金とられた警察官だ。

◆列車のコンパートメントに司令官と軍人、母と娘が座っている。突然、電車がトンネルに入り、真暗になり、ピシャリと音がし、電車はトンネルからでる。母は思った「娘はしっかりしているね、軍人の手が彼女のスカートの下にしのび寄ったので、顔をピシャリと平手でたたいてやったのね！」娘は思った「母は厳しいよ、彼女に手を出した司令官は、ピシャリともらっただろう！」司令官は思った「この野郎が女に手を出したのに、俺がたたかれたんだ！」軍人は思った「またトンネルに入れば、彼をもう一回たたいてやる！」



◆病院に指を骨折した人が来ている。
—ドクター、手術の後に僕は書くこと出来ますか？
—当然だ。
—パソコンは使えますか？
—ええ、もちろん使える。
—バイオリンは弾けますか？
—弾ける、弾ける、心配はいらない。
—すご〜い、前は弾けなかったのに…

◆人生は、コンピューター・ゲームだ…目的は不明だが、画像は綺麗。

——ガニ・タスマガンベトフさんよりのアネクドート——



АНЕКДОТ



◆-Чего Вы так развеселились, доктор?
- спрашивает у стоматолога мед.сестра.
-Сейчас войдёт автоинспектор, который вчера меня оштрафовал.

◆В вагоне поезда едут командир с солдат и мать с дочерью. Неожиданно поезд въезжает в туннель становится абсолютно темно, раздаётся звук пощёчины, поезд спокойно выезжает из туннеля.

Мать думает: молодец доченька, солдат к ней под юбку полез, она ему пощёчину!

Дочь думает: вот мамочка у меня бойкая, командир до неё пристал, так она ему двинула!

Командир думает: солдат гад! До баб полез, а мне досталось!

Солдат думает: будет ещё туннель я ему ещё по рожи дам!

◆Пришел мужик к доктору со сломанным пальцем

- Доктор, а после операции я смогу писать?

- Конечно сможете.

- А на компьютере работать?

- Да, без проблем.

- А на скрипке играть смогу?

- Милейший, сможете, сможете.

- Здорово, раньше никогда не играл, а теперь смогу.

◆Вся жизнь это компьютерная игра.Задуманно херово, но графика отличная.



モスクワ便り

女性は皆美しくスリムでありたいと願う、特に春は。ロシアの冬は、みんな毛皮のコートを着て、ブーツをはくので、姿は見えません。同様に、冬には、身体が凍らないように脂肪を蓄えます。ところが、春に軽い服装に移行する前に、女性達は体重計に乗り、見ます（なんてひどい！）。冬が終わる頃には、数キロ体重を落とさなければ。みんなが休暇で海に行く夏までにすぐに準備しなくてはなりません。

ロシアには、人口の70%が肥満のアメリカのような問題はありません。とは言っても、とても大勢います。日本人は時々驚きながらこう言います「なぜロシアの若い女性は皆、きれいでスリムなのに、中高年の女性は太っているの？」お医者さんが言うのには、加齢と共に身体の物質代謝が変わって、皮下脂肪が蓄えられ始めます。しかし、私は疑問に思うのです。なぜ日本のおばあちゃん達はいつもやせていて、太らないの？体重は変わらないの？原因は、おそらく、生活習慣（若者達はスポーツをする）と食事（ロシアではたくさんの肉と油っぽいスープを食べる）でしょう。

急いでやせるためには、ダイエットをしなければなりません。私は、いろんなダイエットを試してみました。タンパク質（基本的に肉とタマゴを食べ、パンと野菜は食べない）、炭水化物（反対に、野菜だけを食べて肉とタマゴを食べない）。去年、私は、2週間、野菜スープだけを食べました。—今はいやになってしまいました。いいダイエットは、一日おきにキーフェル（コーカサス ヨーグルト）だけを食べる、そしてリンゴをたべる…。しかし、結果はいつも同じです。最初はとてもやせます、しかしその後再び太ってしまう。

今、私は、何よりも良いのは、毎日ジョギングをし、夕方6じ以降は何も食べない、ということが解りました。そして、とても大切なこと、小池先生が教えてくれた3つの簡単なストレッチをすることです。しかしこれは、2週間ではだめ、残された人生ずっとやらなければならないのです（なんてひどい！）…。

イリーナ・ニコラエバ（JCFモスクワ事務局）

ベラルーシの食卓

自然派オムレツ

昼夜が半々になり、ようやく春の息吹を感じるこの頃です。春分の日メニューには、「ナチュラル オムレツ」が載っていました。

ロシアのオムレツは、ぜひ皆さんにごちそうしたい一品です。中身はまろやか、外側の焼き色の焦げ目が、なんとも香ばしくも甘い幸せな一日の始まりを告げます。料理のレシピには、ミルクとありましたが、スメターナ（サワークリーム）を使うのが、ポイントのようです。

JCFの医療訪問団が、ゴメリのホテルで、オムレツに出会ったあの頃、新しい移植治療のために、皆、熱く燃えていました。たくさん食べたくて、「ダブルで！」と注文すると特大のオムレツが運ばれてきたものです。もちろん、その少し前には、寒く暗いレストランで、紅茶のぬくもりを両手で携えていた頃もありました。その頃も、また違った熱意があふれていたのですが。

しかし、この春、ホテルはバイキングのセルフサービスになりました。オムレツは一口大の食べやすい大きさに切られ、盛られています。

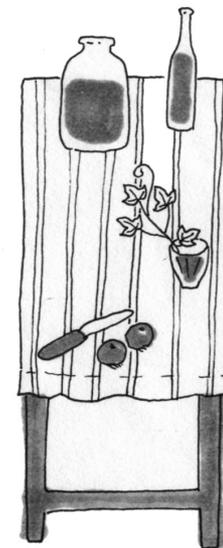
焼きたてのアツアツが懐かしく思い出されます。その時々私たちの熱さと共に…。

<材料>

卵 80g、ミルク 30g、湯煎したマーガリン 5g、湯煎バター 5g、塩 1g

<作り方>

1. マーガリンとバターをフライパンに入れる。
2. 卵をミルクと塩で交ぜ、熱したフライパンで焼く。
3. ざっと火が通ったら、両端から真ん中に卵を寄せ、ピロシキ型に整える。
4. 緑の香野菜を敷き、オムレツを載せる。



振替用紙のメッセージから



◎ごぶさたしています。皆様お元気ですか。私は何だか意気がありません。あきらめてはいないけれどももう少し頑張らなくては…。
(神奈川県)

◎愛と平和は遠いのでしょうか。

(長野県)

◎昨年亡くなった妻の遺志を受けて、行きます。
(東京都)

◎活動大変ご苦労様です。青森も頑張っています。来年は6回目の支援団を派遣する予定です。
(青森県)

◎いつもお世話さまです。匿名でお願いします。
(沖縄県)

◎少しですが役立ててください。

(神奈川県)

◎スタッフの皆様、お世話さまです。マリアちゃんの悲しいお知らせに呆然としております。マリアちゃんの笑顔の写真をながめております。娘の転地療養を兼ねて引越して11月で1年になりました。何としても再発をさせまいと思いつながりの日々でしたが、9月

に再発、10月に入院、そして11月に退院した喜びもつかの間、1週間後に再入院、その後17日間面会謝絶、12月になつてやっと面会できるようになりました。病気の子供を持つ親の気持ち、どんなに辛く悲しいものか…書きながら涙が出てきます。マリアちゃんのお母さんおばあちゃんの胸中いかばかりか…沢山の熱い思いが祈りがマリアちゃんを見守りました。マリアちゃん

の笑顔を忘れません！祈りながら…
(神奈川県)

◎ごぶさたして申し訳なく思っています。これからヨロシク。
(京都府)

(新潟県)

◎いつもグラウンドゼロを送っていただいてありがとうございます。地道なお働きを続けていらつしやることに感謝します。
(石川県)

◎アレクシエイヴィツチさんの『チェルノブイリは過去のものではない未来のこと』と言われた言葉が忘れられ

ません。なにもかもこれからにかかって。

(長野県)

◎会報いつもありがとうございます。会費お送りします。
(石川県)

◎心ばかりのクリスマスプレゼントです。
(神奈川県)

(神奈川県)

◎世界に戦争のないことを祈り続けています。事務局寄附、心ばかりですが御笑納くださいませ。皆様お元気でしょうか。おひっこししましたが、蚊にやられてドーンとネツがでて、日本脳炎かマラリアかとうやく気がもどつてきて、けれど、腎臓がまだのよう

でゆつくりしています。
(東京都)

◎日本の医療保険制度の恩恵を受け、

明るい新年を迎えることが出来そうです。感謝の気持ちを込めて、少しばかりですがチエルノブイリのお子達にお

役に立てばと思います。
(埼玉県)

◎子供達と家族の方に希望の年が訪れますように。
(東京都)

◎子ども達によるクリスマス献金で

す。
(京都府)

◎私は生まれてから50年になります。が、イラクの人と会ったことがありません。でも自衛隊派遣するくらいやったら日当3万円×1000人×1年分日本が出てあげた方がよいと思

(大阪府)

◎本校(山梨英和)の活動を大きく載せていただき、有り難うございました。私も定年退職しますが、おかげで後任

がみつかると思います。
(山梨県)

◎良い年をお迎え下さい。わずかですが、役立て下さい。
(新潟県)

◎皆様、よいお年をお迎え下さい。「戦争絶対反対」を叫び続けます！
(岐阜県)

◎いつも冊子を送っていただいてい

るのにわずかな寄附で申し訳ありません。マリアちゃんの悲報には言葉もあ

りません。
(神奈川県)

◎永井隆賞おめでとうございます。い

つも刊行物を送っていただきありがと

うございます。

(京都府)

◎クリスマスカードありがとうございます。嬉しいです。マリアちゃんのことを哀しみみます。心から。

(石川県)

◎Xmasカード受け取りました。嬉しかったです。ありがとうございます！(長野県)
◎マリアちゃんも「お星さま」になつてしまったんですね。いつも僅かで済みませんが役に立てて下さい。

(東京都)

◎クリスマスレターありがとうございます。ありがとうございました。ささやかですが、クリスマスプレゼントです。お役立て下さい。

(広島県)

◎黄色のお花とにこにこお陽さまの絵のクリスマスカードが届いたよ。何だかとても暖かい！うれしくて私もにこにこ：ありがとうございます。(沖縄県)
◎いつも少額で申し訳ありません。

(大阪府)

◎すべての人の心に暖かい春が来ますように。いつもありがとうございます。

(京都府)

◎ささやかですがクリスマス募金の中からお送りします。(長野県)

◎収入減につき数カ所の寄付先に少しずつで我慢していた大切にしました。少しでもごめんなさい。グラントゼ口は中止して結構です。(東京都)

◎マリアちゃんへの医療支援経験が生かされることを切に祈っています。マリアちゃんが天国から私たちを励まし続けてくれることでしょう。(京都府)
◎少額ですがお役に立てれば幸いです。(東京都)

(東京都)

◎わずかですが。子供たちに本当の笑顔が出ますように。(新潟県)

◎いつもお世話になりありがとうございます。わずかですがお役に立てればうれしいです。(愛知県)

(静岡県)

◎クリスマスカードありがとうございます！うれしかったですよ、とつても。(長野県)
◎こういう活動をしなくてもよい世界

をつくること、核関連の被害が地上からなくなることへの努力が大事です。

(東京都)

◎小さな生命を守るためにわずかですが、お役に立てて下さい。(長野県)

(三重県)

◎クリスマスカードありがとうございます。暗いニュースばかりの1年でしたが、来る年がJCFのみなさんにとつても、チエルノブイリの子どもたちにとつてもすてきな年となりますよう！

(東京都)

◎マリアちゃんの夢を大切に。

(京都府)

◎今年は募金がありません。ゴメンナサイ。事務局のみな様、来年も宜しくお願い致します。(埼玉県)

◎子供の描いた絵はがきありがとうございます。

(東京都)

◎マリアちゃんの死は大変悲しいことです。他の子供達の助けに少しでもお役に立てばと…。

(茨城県)

◎例年12月に送金するのが遅れてすみ

(長野県)

ません。

◎いつもごころう様です。1人でも多くの子供達が健康になってくれますように。ほんの少額ですが、細く長くつづけます。(三重県)

(石川県)

◎いつでもお声かけてください！今年もよろしく願います。ロシア語勉強したいです。(長野県)

(長野県)

◎ある小学校へ朗読に行きました。帰り際に「謝礼」が差し出され、辞退する私に校長先生曰く「チエルノブイリの子どもたちに会いに行く時のお土産代に加えてください」と。ありがたく頂戴して、JCFにおすそ分け。子どもたちの薬代として。(長野県)

◎あらたな生命の、より安らかに守られる世を願って。(長野県)

◎少額で申し訳ありません。(京都府)
◎今年も宜しくお願い致します。

(石川県)

◎応援してます、がんばって下さい。
イラク問題の大きさに比べればチェルノブイリの問題など大したことはない、とならない様祈ってます。(徳島県)
◎今年もよろしくお願い致します。昨年未元気でいたごほうび(保険)をいただきました。いろいろな方々のおかげです。少しですが送らせていただきます。(千葉県)

(千葉県)

◎我が子も無事一才を迎え、お世話になった様々な人達への感謝の気持ちとして。
(埼玉県)

(埼玉県)

◎鎌田先生、スタッフの皆様から心からの応援です。
(東京都)

(東京都)

◎少額ではございますが、お許し下さい。
(東京都)

(東京都)

◎いつも会報をありがとうございます。今日は会費として送金させていただきました。今後ともよろしくお願

ます。

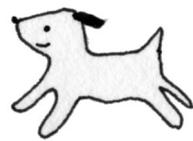
(東京都)

◎寄附します。がんばって下さい。「アレクセイと泉」を二回、寮生たちと見ました。少しでもお役に立てればと思います。ピースパレードなど若者たちも積極的に参加しています。

(神奈川県)

◎少ないのですがこのお金をベラルーシの国の人、こまっている方に向けてください。ベラルーシにおくつてください。
(岐阜県)

(岐阜県)



領収はがき送付について

先日、ある方から会費の振り込みがあり、同時に次のようなメールが事務局に送られてきました。

グランドゼロって年4回の発行ですよね。会費を納めたら、最大で3ヶ月間きちんと事務局が確認したのか、会員の元には知らされないのでしょうか。会費を収めたのですが、そういう手元に残るは郵便局の受領証だけで、心もとないなあとおもらったもので。隔月でグランドゼロが発行されない現在、はがき一枚でも入金を確認したとの通知があると会員さんは安心するのではないのでしょうか？

今までは領収書が必要だとおっしゃる方のみ、領収のはがきをお送りしていただきました。しかし、ご寄付頂いた方が、本当に事務局に自分のお金が届



いているのか不安に思う方も多いのではないかと、いや、領収はがきにかけられるお金は支援にまわして欲しいと思う方もいるのではないかと、以前から事務局内でいろいろ検討して参りました。

今回、JCFをよく知っている方からこういったメールが来たこともあり、4月1日からご寄付頂いた方全員に、確かにご寄付をお受け取りしましたというおはがきをお送りすることに致しました。領収のはがきが必要の方は、振込用紙に不要の旨を書いて頂ければ幸いです。

ご寄付頂いた方のお名前は、今まで通りグランドゼロに掲載させていただきます。どうぞご了承下さい。

2004 年度会費・寄付納入のお願い

今年度も引き続き JCF への暖かな応援をよろしくお願ひします！

会費寄付は納入より一年間を有効期限とさせていただきます、グランドゼロを発送させていただきます。

郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金
賛助会費	5,000 円
特別賛助会費	30,000 円
事務局がんばれ会費	10,000 円
一般寄付	(金額指定無し)



2004年 サンクトペテルブルグツアー

写真家・映画監督の本橋成一さんの作品「無限抱擁」「ナージャの村」「アレクセイと泉」と「生命の旋律」から代表作100点を展示する写真展が、ロシアの古都サンクトペテルブルグで開催されます。チェルノブイリ、そして日本各地での自然と人間の関わりが共通テーマです。古都サンクトの散策と写真展ツアーをご案内いたします。

日程： 5月27日～6月2日（7日間）

訪問先：ロシア連邦共和国サンクトペテルブルグ

参加費用：約22万5千円（朝食5回、昼食5回、夕食5回）

最小催行人数6名

申込締切：4月10日

日付	行動予定	宿泊
5/27 (木)	成田 SU576 12:00 モスクワ着 17:00	モスクワ
5/28 (金)	モスクワ観光 モスクワ発 SU781 20:55 サンクト着 22:25	サンクト
5/29 (土)	エルミターージュ美術館 キーロフ劇場観劇	サンクト
5/30 (日)	写真展オープニング 市内観光	サンクト
5/31 (月)	ピョートル宮殿	サンクト
6/01 (火)	サンクト発 SU786 14:30 モスクワ着 16:10 モスクワ発 SU581 19:25	機内泊
6/02 (水)	成田着 10:00	

※5月10日頃に事前説明会を行います。

2004年 スタディツアー

サンクトペテルブルグで写真展鑑賞と古都散策、JCFが支援しているベラルーシの病院と埋葬の村で村人との交流ツアーです。

日程： 5月28日～6月3日（7日間）

訪問先：ロシア連邦共和国サンクトペテルブルグ

ベラルーシ共和国ゴメリ州

参加費用：約22万5千円（朝食5回、昼食5回、夕食5回）

最小催行人数6名

申込締切：4月10日

日付	行動予定	宿泊
5/28 (金)	成田 SU576 12:00 モスクワ着 17:00 モスクワ発 SU781 20:55 サンクト着 22:25	サンクト
5/29 (土)	市内観光・エルミターージュ美術館	サンクト
5/30 (日)	写真展 夜行列車でゴメリへ	列車泊
5/31 (月)	ゴメリ着 チェチェルスク地区病院	ゴメリ
6/01 (火)	ベトカ — ブジシチェ村 ゴメリ発 19:25	列車泊
6/02 (水)	モスクワ着 09:05 モスクワ観光 モスクワ発 SU581 19:25	機内泊
6/03 (木)	成田着 10:00	



※5月10日頃に事前説明会を行います。

<問い合わせ、申し込み先>

JCF・日本チェルノブイリ連帯基金

〒390-0303 松本市浅間温泉 2-12-12

TEL. 0263-46-4218 FAX. 0263-46-6229

ニュースクリップ

< 国内 >

●女川原発2号機、ひび割れ再稼働

東北電力は、定期検査中の女川原発2号機の原子炉をシュラウドのひび割れを補修しないまま約半年ぶりに起動した。

(11月27日 毎日新聞)

●イラク派遣自衛隊員、放射線測定器携行

陸上自衛隊はイラクへの派遣隊員全員に放射線測定器の「新型線量計」を携帯させることを決めた。第2師団(北海道旭川市)が開いた家族説明会で示し、「劣化ウラン弾に対する隊員の不安を解消するため」と説明した。

(12月20日 毎日新聞)

●巻原発建設断念を正式決定

東北電力は臨時取締役会を開き、新潟県巻町に計画していた巻原発1号機の建設断念を正式に決めた。建設が法的に決まっていた原発の計画断念は初めて。

(12月24日 毎日新聞)

●被曝で骨髄腫と労災認定

富岡労働基準監督署(福島県富岡町)は、元建設会社社員長尾光明さん(78)が骨髄の病気にかかったのは、原発内の工事に従事して被曝したのが原因だったとして、労災と認定した。長尾さんは1977年から82年にかけて、東京電力福島第一原発、新型転換炉原型炉ふげん、中部電力浜岡原発で配管のひび割れ防止工事などを担当。被曝総量は計70ミリシーベルトに達し、98年に多発性骨髄腫と診断された。

(1月19日 共同通信)

●サイクル機構、後処理費用2兆円と試算

核燃料サイクル開発機構は、日本原子力研究所との統合後、原子力施設の廃止措置や低レベル放射性廃棄物の処分などの後処理(バックエンド)に掛かる費用が、原研と合わせて80年間で約2兆円に上るとの試算を示した。

(1月22日 時事通信)

●再処理工場、化学試験で設備不良307件

日本原燃は、青森県六ヶ所村で建設中の使用済み核燃料再処理工場で実施した化学試験の報告書を、経済産業省原子力安全・保安院に提出した。薬品漏えいや換気設備破損などの設備不良が307

件あり、原燃は改善作業を進めている。

(1月22日 毎日新聞)

●保安院、「もんじゅ」改造を認可

95年12月のナトリウム漏れ事故以来、運転を停止している核燃料サイクル開発機構の高速増殖原型炉「もんじゅ」について、経済産業省原子力安全・保安院は、改造工事の詳細設計を認可した。

(1月30日 時事通信)

●浜岡1号機、シュラウド支持部ひび割れ

中部電力は、定期点検中の浜岡原発1号機で、シュラウド(炉心隔壁)本体を支えているシュラウドサポート部分の溶接線で、新たに47カ所のひび割れが見つかったと発表した。このほか、シュラウド外側から冷却水を吸い込むジェットポンプのうち5台で9カ所のひび割れも確認された。

(2月12日 時事通信)

●ビキニ水爆被災漁船員から聞き取り

「高知県ビキニ水爆実験被災調査団」は、ビキニ環礁での米国の水爆実験で被災したマグロ漁船員らを再度聞き取りした結果を公表した。同調査団は「晩発性の放射線障害とみられる症状で苦しんでいる人が多い」として、今後さらに調査を続け、国などに支援を要請していくという。

(2月19日 共同通信)

●ビキニ事件50年、焼津で平和行進

米国による水爆「ブラボー」の実験で、静岡県焼津市の遠洋マグロ漁船「第五福竜丸」が被曝し、半世紀を迎えた。同市では約2000人が、「死の灰」を浴び40歳で放射能症のため亡くなった元同船無線長・久保山愛吉さんが眠る墓前まで平和行進した。参加者は「原水爆の犠牲者は私を最後にしてほしい」と言い残した久保山さんの墓前に、核廃絶の願いを込めて献花した。

(3月1日 毎日新聞)

●仏から高レベル放射性廃棄物返還

フランスから返還された高レベル放射性廃棄物のガラス固化体132本を積んだ輸送船が、青森県六ヶ所村のむつ小川原港に到着、日本原燃の貯蔵施設へ搬入した。海外からのガラス固化体返還は9回目。

(3月4日 共同通信)

< 海外 >

●核実験に携わった仏退役軍人ら提訴へ

フランスによる核実験に携わり、健康被害を被った退役軍人らが、仏当局を相手取り、危険を承知しながら十分な防護措置を取らずに実験を強行したとして、損害賠償請求訴訟をパリの裁判所に起こすと発表した。

(11月28日 毎日新聞)

●米、小型核研究予算を計上

ブッシュ米大統領は、5キロトン以下の小型核や、地下深く潜伏する敵の部隊やテロリスト、大量破壊兵器を攻撃目標にした「強力地中貫通型核」の研究予算を盛り込んだ総額273億ドルのエネルギー省関連歳出法案に署名、同法が成立した。

(12月1日 共同通信)

●エノラ・ゲイ公開、被害の説明なし

米スミソニアン航空宇宙博物館新館が開館し、広島に原爆を投下したB29爆撃機「エノラ・ゲイ」の復元機が一般公開された。エノラ・ゲイは原爆被害の説明なしに展示されていることから、被爆者団体や米国の市民団体などが反発している。

(12月15日 時事通信)

●イラン、IAEA追加議定書に調印

イラン政府は、核査察強化のため査察範囲を民間機関に拡大し、事実上の抜き打ち査察も可能とする国際原子力機関(IAEA)の追加議定書にウィーンでIAEA本部で調印した。

(12月18日 共同通信)

●イラクの現状「戦争で深刻な環境破壊」

イラク戦争の軍事行動やそれに続く略奪などの結果、同国内で放射性物質や化学物質の汚染による、深刻な環境問題が数多く起きているとする国連環境計画(UNEP)の報告書が明らかになった。米英軍による劣化ウラン弾の使用を確認するとともに、汚染が起きたとみられる地区を数カ所特定。周辺住民や環境への影響調査など、対策が早急に必要と提言した。

(1月7日 共同通信)

●サマワで300倍の放射線量を測定

陸上自衛隊の派遣先となるイラク南部サマワで、地元の人権活動家と日本の市民団体「イラク国際戦犯民衆法廷」のメンバーが兵器の残骸の放射線量を調査した際、通常レベルの約300倍の線量が測定されたことが分かった。イラク戦争中、米軍が劣化ウラン弾を投下した可能性が高い。

(1月10日 共同通信)

●米核実験で被曝島民840人死亡

太平洋ビキニ環礁で米国が1946年から58年にかけて実施した原水爆実験で、白血病やがんなどの健康障害を負ったと認定された島民が1865人もおり、このうち約840人が死亡していたことが、マーシャル諸島共和国のまとめで明らかになった。米国は46年から13年間にマーシャル諸島のビキニ、エニウェトク環礁で67回にわたり計約11万キロトンの核実験を実施した。

(1月13日 共同通信)

●リビアがCTBT批准

包括的核実験禁止条約(CTBT)機構は、リビアがCTBTを批准したと発表した。批准国は109カ国になった。また、リビアは化学兵器禁止条約(CWC)も批准した。国連のアナン事務総長は「リビアの決断を歓迎する」との声明を発表した。

(1月14日 共同通信)

●IAEA、核不拡散体制は危機的と警告

IAEAのエルバラダイ事務局長は声明を発表し、イランやリビアの査察を進める中で核技術などを扱う「闇市場」の存在が判明するなど、核不拡散体制は危機的な状況にあり「より強固な保障体制の構築が緊急に必要だ」と警告した。

(2月4日 共同通信)

●イラク市民の死者1万人超える

イラク戦争で直接、間接的に死亡したイラク市民の数を独自に集計している英米系研究者らの調査グループ「イラク・ボディー・カウント」は、昨年の開戦以来の死者が最多1万79人となり、1万人を超えたことを明らかにした。死者数はさらに増える見通しという。

(2月8日 共同通信)

●ビキニ事件50年、マーシャルで記念式典

米国の水爆実験「ブラボー」により第五福竜丸乗組員ら日本の漁船や周辺島民らが被災して50年を迎え、実験地、マーシャル諸島共和国の首都マジュロで、政府主催の記念式典が行われた。実験が行われたビキニ環礁の出身者や、実験で発生した放射性降下物を浴びたロングラップなど他環礁の住民ら500人が参加した。

(3月1日 毎日新聞)

ビキニ水爆実験被災から50年

都立第五福竜丸展示館で 記念特別展



からは放射能が検出され、廃棄処分された。第五福竜丸のほかにも、800隻以上の漁船が被災した。また、54年5月ごろから日本各地で強い放射能雨が降り、環境汚染への不安が広がった。広島、長崎に続いて三番目の原水爆による被災となったビキニ事件は原水爆禁止運動のきっかけともなった。

その後、第五福竜丸は、東京水産大学の練習船「はやぶさ丸」として改造され使われていたが、船の老朽化により廃船処分となり、東京・夢の島のゴミ処分場に放置された。1968年頃から第五福竜丸の保存運動が活発になり、ビキニ水爆被災から22年後の1976年に東京・夢の島公園内に「都立第五福竜丸展示館」が開館した。展示館では現在「ビキニ水爆実験被災50周年記念特別展」が開催されている。常設展示がリニューアルされ、第五福竜丸から採取された「死の灰」の

粉「死の灰」を浴び被曝した。その半年後、9月23日に第五福竜丸乗組員の無線長・久保山愛吉さんが急性放射線障害により亡くなった(2003年末現在で、第五福竜丸の乗組員23人のうち12人が肝硬変や肝臓がんなどで亡くなられている)。第五福竜丸が漁獲したマグロやサメ

試料や、第五福竜丸の当直日誌、漁労日誌、乗組員の作業着、船内で使われていた布団や生活用品など水爆実験に被災した当時の様子を伝えるものが解説パネルとともに展示されている。また、核実験場となったマーシャル諸島の住民の被害、世界の核実験場での被害の実態などが写真パネルや資料で紹介されている。

険性も強くなり、核兵器が使用されるおそれが高まっている。ビキニ水爆実験被災から50年が経った。しかし、ビキニ事件は過去のできごとではない。第五福竜丸はいまだ航海中なのだ。

アメリカの核実験場となったマーシャル諸島では、いまだに放射能汚染がひどく、故郷の島に帰れない住民たちがいる。故郷を追われただけでなく、伝統的な生活様式や文化も破壊され、健康不安をかかえながら暮らしている。水爆実験に遭遇した多くの漁船の被災の実態も解明されていない。「9・11テロ」以降、アメリカはテロ組織などに対して「使える」核としての小型核兵器を開発しようとしている。ロシアもそれに追随している。核拡散の危

ビキニ水爆実験被災50周年記念・図録 「写真でたどる 第五福竜丸」



編集・発行：(財)第五福竜丸平和協会
発売：平和のアトリエ
頒価：2800円 (A4判、104頁)

都立第五福竜丸展示館

東京都江東区夢の島3-2 (都立夢の島公園内)
TEL 03-3521-8494 / FAX 03-3521-2900
地下鉄有楽町線、JR京葉線、りんかい線「新木場駅」
下車徒歩10分
開館時間：午前9時半～午後4時 (月曜日休館)
入館無料





心揺さぶる映画 「ゴジラ」第一作目を見る

2004年3月1日。この日のちょうど50年前、米国がマーシャル諸島のビキニ環礁で水爆「ブラボー」の爆発実験をし、第五福竜丸をはじめ、日本のマグロ漁船が多数被ばくしました。このメモリアルデーにちなみJCFでは、JCFスタッフ、知人の方々と、第一作目「ゴジラ」を見ました。

私はゴジラシリーズのどの作品も見ることがなかったのですが、「ゴジラ」というのは、ゴジラ以外にもたくさんの怪獣が出てきて、特撮を楽しむ娯楽映画、という印象を持っていました。しかし全ゴジラシリーズの原点であるこの一作目は、平和へのメッセージ溢れる作品で、私を持っていた印象とはだいぶ違っていました。

このゴジラのあらずじは、何万年もの間海底に潜んで生息し続けていたゴジラが、水爆実験によって生活環境が破壊され、日本社会に現れて東京の街を破壊し、焼き尽くす、といったもの。

ゴジラが水爆実験のあった1954年に公開されていることなどを考えると、当時だけこの映画がタイムリーで、ショッキングな映画だったかが容易に想像されます。

特撮は、今の映画を見慣れている私たちにとってはちやちなものに見えるかもしれませんが、その拙さを越えて訴えてくる力強さがこの映画にはあります。

ゴジラは破壊の限りを尽くす、大変恐ろしい存在なのですが、同時に水爆実験の被害者です。その事実を苦悩を覚え、放射能を浴びながらも生き続けているゴジラの秘密を探りたいと思う古生物学者（志村喬がまたいい味を出しています）、ゴジラをも死に至らしめる、核より恐ろしい発明を成し遂げってしまった化学者の大変な苦悩、など、あげればきりがありません。現代的なテーマをたくさん含んでいる映画です。

また、ゴジラが破壊した後の東京

の焼け野原、病院で溢れかえっている遺体、けが人の描写……。息が詰まりそうな程です。日本人が体験した戦争をまざまざと思い起こさせるのは、この映画が終戦からまだ間もない時のものだったからでしょうか。

一方で、今では考えられない程ステレオタイプな女性の描き方、当時の人の紋切り調のしゃべり方、漁村の人々の土着的な感じなど、50年前の日本はこんな感じだったのか、とちよつと驚きを感じる部分も沢山あります。

いろんな角度から楽しめ、考えさせられ、心揺さぶられる第一作目の「ゴジラ」。

皆さんも、是非一度、ご覧になってみてください。

（事務局・重岡）



DVD「ゴジラ」

1954年/モノクロ/97分
監督：本多猪四郎 特殊技術：円谷英二
音楽：伊福部昭
出演：宝田明 河内桃子 平田昭彦 志村喬
発売元：東宝株式会社 (TDV2593D)
定価：6000円＋税

こんにちは！

Здравствуйте!



信大病院小児科病棟 訪問イベントを終えて

村上俊輔（信州大学地域連携ゼミ）

極的な態度だった。創作作業に熱心に取り組んでいる時の顔は真剣そのものだ。作品を作り上げようと努力している姿に感動を与えられた。

遊んでいる子供たちを見てみると、とても彼らが重い病気を抱えているようには感じられなかった。子供が持っている素直さや明るさゆえにそう見えたりは限られた病院内での生活の中から何か楽しいこと、面白いこと、興味を引くものを探しているのだと思う。今回のイベントを通してそんな彼らの好奇心を満たす手伝いが出来たのなら、私たちにとってこれほどうれしいことはない。

半年かけて準備した今回のイベントを通じて、私たちは非常に多くの感動や発見を手にする事が出来た。最後になってしまったが、このイベントを手伝っていただいたJCFや松本青年会議所の方々に改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。



子供の環境への順応力というものには目をみはるものがある。今回のイベントを通じてそんな印象を強く受けた。

私たちは地域連携ゼミのメンバーは企画を練る段階で、子供達の興味をひくことが出来るか、飽きてしまわないか、冷めた雰囲気になつてはまずい、など、子供の反応が消極的なものになるのではないかと気をもんでいた。しかし実際にはそれは杞憂で、私たちが考えている以上に子供たちは自然にイベントに参加し積極的に楽しんでいった。

イベント会場に入ってくる子供たちは誰もが笑顔でワクワクしている表情だった。母親に付き添われて入ってきた子供たちも最初は不安げな表情をしていても、目当ての遊びを見つけると顔がパツと明るくなる。その屈託のない笑顔が忘れられない。見ているこちらも嬉しくなってくる笑顔だ。折り紙のブースにもマジックバルーンのブースにも子供たちは進んで飛び込み、初対面の私たちになんの抵抗もなく作り方を教わろうと話しかけてくる。子供たちは私たちが想像していたような受け身ではなく、むしろとても積

2月4日、長期入院している子どもたちを励まそうと「豆まきイベント」が信州大学付属病院小児科病棟で行われた。



「正しい戦争」は本当にあるのか

藤原帰一



「正しい戦争」は本当にあるのか
著者：藤原帰一
発行：ロッキング・オン
定価：1600円＋税

Book

著者は季刊誌「SIGHT」（ロッキング・オン）で時評インタビューを連載中の気鋭の国際政治学者。どうして戦争は起こるのか、どうして戦争はなくなるのか、根源的な問いである「戦争と平和」についてインタビュー形式で論理的にわかりやすく語られている。

茶色の朝

フランク・パヴロフ



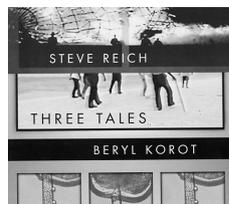
茶色の朝
物語：フランク・パヴロフ
絵：ヴィンセント・ギャロ
訳：藤本一男
メッセージ：高橋哲哉
発行：大月書店
定価：1000円＋税

Book

著者のパヴロフはフランスの心理学者、人権運動家。ごく普通に日々の生活を営む人々のあいだにいつの間にか忍び込み、考え方や行動を支配するようになるファシズムや全体主義の怖さを静かに淡々と描く寓話。巻末には哲学者・高橋哲哉氏のメッセージ「やり過ぎないこと、考えつづけること」を掲載。

スリー・テイルズ (3つの物語)

スティーヴ・ライヒ+ベリル・コロット



スリー・テイルズ
(ヒンデンブルグ+ピキニ+ドリー)
音楽：スティーヴ・ライヒ
映像：ベリル・コロット
ワーナーミュージック・ジャパン
WPZS 30001～2 (CD+DVD 2枚組)
定価：3800円＋税

DVD

ミニマル・ミュージックの旗手、ライヒとビデオ・アーティスト、コロットのコラボレーションによる「デジタル・ビデオ・オペラ」。テクノロジーの時代であった20世紀を象徴する出来事「飛行船ヒンデンブルグ号炎上事故」「ピキニ環礁での原爆実験」「クローン羊ドリーの誕生」を取り上げ、記録映像や関係者たちのインタビュー映像をカラージュシ、音楽とシンクロさせた作品。

水爆ブラボー

豊崎博光、安田和也



水爆ブラボー
著者：豊崎博光、安田和也
発行：草の根出版会
定価：2200円＋税

Book

1954年3月1日、アメリカが実施した水爆「ブラボー」実験で被曝したマーシャル諸島の住民や第五福竜丸の乗組員たちの被害の実態が、聞き取り調査や資料によりわかりやすくまとめられている。著者の一人、フォトジャーナリストの豊崎氏による写真も多数掲載されている。

ヒロシマを生きのびて

肥田舜太郎



ヒロシマを生きのびて
著者：肥田舜太郎
発行：あけび書房
定価：2000円＋税

Book

広島原爆で被曝した医師である著者の戦後自分史。医師として民医連運動、医療生協運動に携わり、また被爆者として原水爆禁止運動に参加し、国内外で被爆の実相を伝える語り部、講演活動を精力的に行ってきた。「低線量放射線による体内被曝」の恐ろしさを訴え続けている。

巻原発・住民投票への軌跡

桑原正史+桑原三恵



巻原発・住民投票への軌跡
著者：桑原正史+桑原三恵
発行：七つ森書館
定価：3500円＋税

Book

東北電力による巻原発の建設計画に対し、地元住民が30年以上にわたり粘り強く反対運動を展開し、住民投票を実現させるまでの軌跡を追った、住民運動当事者によるドキュメント。本書が出版されてまもなく、東北電力は巻原発建設計画を正式に断念した。

女の机

小林登美枝

女の机
著者：小林登美枝
発行：オフィスエム
定価：1800円＋税



一冊の本の背表紙を手のひらで閉じる。しばし、作り手の思いがジーンと伝わってきて、涙があふれた。

凛と冴え渡った厳寒の朝だった。地方紙のお悔やみ欄に「小林登美枝さん逝く」と報じられていた。元毎日新聞の記者であり、長野県の地方紙信濃毎日新聞に42年間コラムを書き続けられた。

平塚らいちのような研究者としても有名な方である。

私は、家庭でも、社会でも、一人の人間としての存在に性差による偏見や差別があるものとは、あまり感じてこなかった。でも、それは女性の選挙権を勝ち取る戦い、フェミニズム運動、ジェンダー思想と女性が社会的な第一線に立つことが疎まれた時代から、連続と続いた女性のためのムーブメントがあったから。しかしながら、…である。

時々、男と女に、社会が求めるものが違っている、と感じることがある。

小林さんは、終始一貫「女の自己主体の確立」を語っている。

女性が主体的に生きるには、自分の部屋が必要、それはすなわち精神と経済的な自立を意味する。部屋を確保できなければ、せめて「机」という訳だ。

女性としてというよりも、一人の人間として、主体的でありたい。自分の言葉で考え、語りたい。それが、自由というものではないだろうか、と考えてきた私は、小林さんの文の至る所に、「そう、そう」とうなずいてしまうのだ。そして、こうして一冊の書として手に載せた時、小林さんの家族への思いやり、自然の移ろいを全身で受けとめている姿に彼女のすごさを改めて感じる。

背筋を伸ばして生き抜いたひと。一人の人間として、ゆたかな人生をまっとうされた。後続する者達を育て、やさしく抱いて下さる。

その姿に惚れた編集者達だった。限られた命を抱きしめている小林さんとのやりとりの息づかいが、伝わってくる。「女の机」には、一人の人間の「いのち」が解き放たれている。

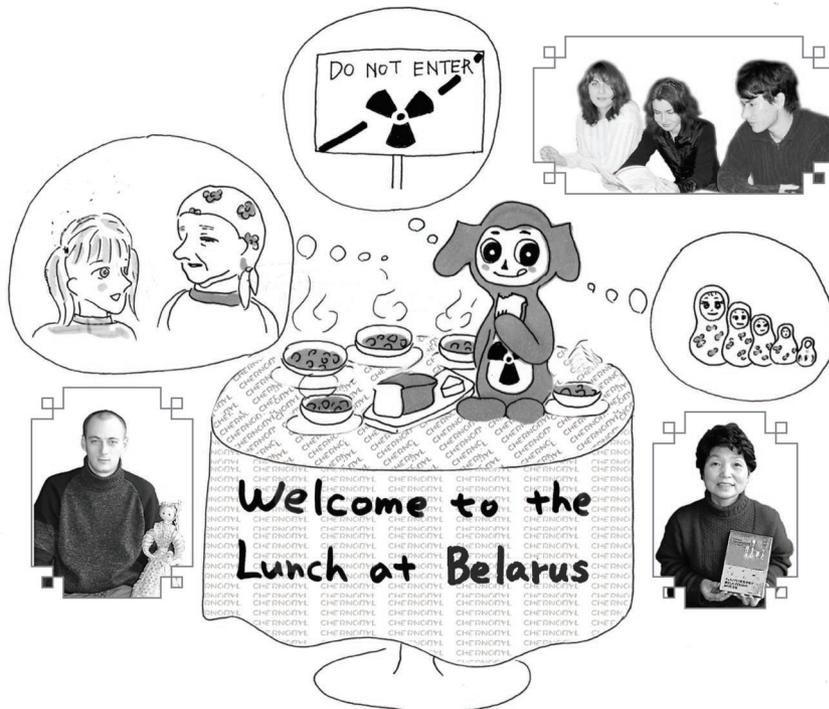
事務局・神谷さだ子

ベラルーシの食卓

～チェルノブイリを語ろう～

☆ 日時 4月24日(土) 11:00～15:00
☆ 場所 松本市中央公民館 (Mウィング) 調理実習室・404

- ・みんなで作ろう！ ボルシチ・オリピエサラダ
アーリャ・アレブチーナ(信州大学留学生)
オレーシャ・フラパータヤ(信州大学留学生)
- ・ベラルーシ・チェルノブイリ概要紹介
アレクサンダー・フェダラウィチェス(信州大学研究生)
ガニ・タスマガンベトフ(信州大学留学生)
- ・「わたしたちの涙でゆきだるまが溶けた」より
朗読 力丸邦子





第 59 号

発行日 2004年3月26日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字

貝原浩

イラスト

武内裕子

重岡朱

表紙デザイン

酒井隆志

スタッフ

神谷さだ子

布山みな子

重岡朱

高橋俊光

佐内裕之

印刷

電算印刷

松本市筑摩 1-11-30

■編集後記

旅立ちの季節。この春はJCFもその周りも何やら慌ただしい。様々な出来事をふり返ると、偶然のように見える必然もあり、必然のように見える偶然もあるかもしれないと思う。でもいつも自分の居る場所を選んだのは自分だと信じる勇気を持って、繋がって支えてくれているたくさんの手を忘れないで、新しい春に「こんにちは！」
(布山)

■事務局日誌■

< 12 月 >

- 4日 市民タイムス座談会
- 19日 グランドゼロ発送作業
NPO 学習会
- 22日 冬至・キャンドルナイト
- 24日 松浦さん、田合さん来局
- 17、24日：ミンスク・小児血液がんセンターとの衛星通信（信州大学）
- 5、12、19、26日：ロシア語講座

< 1 月 >

- 22日 松本大学からのインタビュー
- 27日 長野郵政局ボランティア貯金助成金説明会
- 28日 第73次訪問団出発
- 14、21日：ミンスク・小児血液がんセンターとの衛星通信（信州大学）
- 9、16、23日：ロシア語講座

< 2 月 >

- 3日 第73次訪問団帰着
NGO 相談員連絡会
- 4日 豆まきイベント（信州大学病院小児科）
- 11日 長崎出張（鎌田理事長、神谷、布山）
- 13日 永井隆平和記念・長崎賞授賞式
- 16日 医療機器搬入
- 18日 医療機器梱包
- 20日 NPO 学習会
- 24日 エコー搬入
- 25日 訪問団支援品グラン発送
- 27日 第74次訪問団出発
- 6、13、20、27日：ロシア語講座

< 3 月 >

- 1日 ビキニ水爆実験被ばくメモリアルデー「ゴジラを見る会」
- 4日 第74次訪問団帰着
- 19日 郵政局ボランティア貯金推進協議会
- 12、18、22、24日：
ミンスク・小児血液がんセンター、
ゴメリ放射線医学人間環境センターとの衛星通信（信州大学）
- 5、12、26日：ロシア語講座

JCF / 日本チェルノブイリ連帯基金

●本部 〒390-0303

長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail jcf@jca.apc.org

Website http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京 〒164-0003

東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレタイムス社気付

TEL03-3227-1405 FAX03-3227-1406

●京都 〒607-8405

京都府京都市山科区御陵田山町 13-3

TEL075-591-7772

アレクセイと泉

Алексей и Крыница

上 映 予 定

上映日	上映場所	問合せ先・備考
・5/03 (月)	神奈川県 鎌倉市	監督×スペシャルゲスト トーク
・6/26 (土)	愛知県 豊橋市公会堂	0533-67-7167 (平田) 監督講演
・6/27 (日)	東京都 新宿区経王寺	03-3341-1314 (互井) 監督参加

※上映予定は変更になることがあります。
サスナフィルムにご確認下さい。

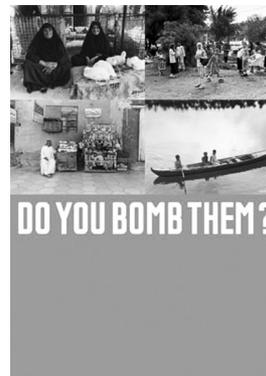
情報提供・サスナフィルム (03-3227-1870)

ビデオ「DO YOU BOMB THEM?」 緊急発売!

池澤夏樹・本橋成一の「イラクの小さな橋を渡って」がビデオになりました!

2002年11月、作家の池澤夏樹と写真家の本橋成一は開戦前のイラクを旅しました。そこには、人なつこく話しかけてくる人々や、食卓に乗り切らない豊かな食事、街角であどけなく笑う子供たちの姿がありました。この人たちのことを伝えなくては、そして今しか戦争を止めることはできない、という強い思いから、その旅の様子を「イラクの小さな橋を渡って」(光文社刊)という小さな本にまとめました。

残念ながら、その後戦争は始まり、現在では自衛隊派遣の報道で世論が揺れる毎日ですが、今この時に、もう一度、戦前のイラクの様子を観てほしい、そして私たちがすべきことを考えるきっかけになればという思いから、ビデオ「DO YOU BOMB THEM?」を製作しました。



「DO YOU BOMB THEM?」

撮影・監督：本橋成一

朗読：池澤夏樹

音楽：坂田明

編集：村本勝

イラスト：下中菜穂

VHS / カラー / 17分

価格：2100円(税込)

問い合わせ先

ポレポレタイムス社

TEL 03-3227-1405 FAX 03-3227-1406

e-mail polepole@mac.email.ne.jp